

三年屋

作：懷古軒ルーネコ

はじめまして。ルーネコです。タマさんと同じ町内のラーメン屋に住んでいます。えっ、タマは元気かって？ もちろんですよ。

とくに二十歳は過ぎてるのに、耳と目が少し遠くなっただけで、今でも近所をウロウロしてます。で、タマさんが言うんですよ。この辺のネコはみんな小説書かなきゃならないって。ホントですか？それに、ネコはみんな聊斎志異くらい読んてるから、オバケ小説なら書けるって。で、書けって。いそいで聊斎志異読みました。長い短いの、いろんなお話が詰まって、全部読むのは大変でした。でも、すごく面白い。

気に入ったお話には共通点があつて、オバケと人間が仲良くしてるって、それからちよつと悲しい恋愛。このふたつが入ってるいくつかのお話を参考に、まるつきり新しいお話を書くことにしました。

お話の舞台は昔々です。わからないことはミツチャンにききました。でもこれは間違いだったのかも。あとでできたら、日本史は最初から最後まで落第点だったって。人間を簡単に信じちゃいけませんね。

わたしの最初の小説なので、きつとヘタクソだと思います。我慢して読んでくれたら嬉しいです。わたしの写真なんかは最後あたりのページに載せます。またそこで。



懐古軒ルーネコ

おきぬ

幸助が谷中に下宿したのは、松が取れたばかりの正月はじめだった。今年の入学試験には間に合わないことは最初からわかってた。東京から行商に来る反物屋の紹介で、廃業した瀬戸物屋の二階に賄付で部屋を借りたのだ。階下には元瀬戸物屋の老夫婦が住んでいる。受験生という触れ込みもあって、老夫婦は幸助に食事の知らせ以外ではめったに声をかけなかった。これは幸助には好都合だ。田舎訛りを聞かれるのが何より恥ずかしかったからだ。

こんなはずではなかったのだ。よもや島流し同然、東京に追い払われるとは思ってもいなかった。すべては自ら蒔いた種だが、まさか種が芽を出して派手な花を咲かせ、村中の注目を集める事態になろうとは思像もしていなかった。元瀬戸物屋の婆さんが火を入れてくれた火鉢を抱えて、さて、これからどうしようと思案するしかなくなっていた。

明治まで庄屋だった大地主の三男坊なら、のらくら生きていけば生涯暮らせただけだ。身代は継げなくても捨扶持で家族くらいは養えただろう。近郷近在で秀才と呼ばれ、役者の落し種ではないかと噂された才色兼備の幸助なら、あるいは在の取締りくらいにはなれたかもしれない。村芝居の座長にもなれただろう。だが、今では将来など見通せないばかりか、明日何をすればいいかわからない野良犬に成り下がってしまった。

おきぬという娘がいた。在所の小作の娘で、幸助と同じ年だった。ちよつときつい顔付きだが色白で妙な色

気があり、女衞に高く売れそうだと口の悪い婆あたちは言っていた。最初に誘ったのが幸助なのは間違いない。しかし二度目からはおきぬが誘うようになり、そのままずるすると一年以上続いてしまった。幸助にしても、同年代の男どもと一緒に隣村の後家に通う必要がなくなり、妻を持ったような誇らしい気分だった。

そのうちおきぬの腹が迫り出してきたのは、今から考えれば理の当然だろう。去年の晩秋、夜遅くにおきぬの父親が幸助の家に来た。直談判といえは聞こえが悪いにしても、要は幸助の父親に「どうしてくれる」と迫ったのだ。幸助の父は、まず金で解決しようとしたが、金だけでおきぬの腹は引つ込まない。そこで、金に加えて、おきぬに良い縁談を持ちかけた。相手は同じ小作で泰治の息子、春治だ。春治は「牛の春治」と呼ばれる大男で性格だけは温厚だった。ただ、控え目に言ってもスズメ程度の脳しか持ち合わせていない欠点があった。尋常小学校一年のとき、成績不振で放校になったことからわかる。

金と縁談と、その他小作料の優遇など様々な約束をされて、おきぬの父は納得して帰って行った。父たちの話を隣室で聞いていた幸助は、これは容易ならんことになったと動転したが、意外なことに父は幸助に小言さえ言わず、何事もなかったような顔をしていた。これでは蛇の生殺しだ。叱責されたほうがよほど楽だ。幸助はとりあえず、おきぬと逢うのはやめようとしてだけ決めた。

泰治の家では祝言の支度が始まっていた。春治は大喜びで、隣近所を一軒一軒回り「俺に嫁が来る」と言っただけで歩いた。そのせいもあって噂が広まり、このときまでに村の全員が祝言の本当の理由を知ってしまった。幸助は外出もままならず、日の光を恐れるコウモリかネズミのように奥の間に隠れているしかなかった。

おきぬの家の近くに幸助の遊び仲間の弥太が住んでいた。弥太があとで教えてくれたところによると、おきぬの家は大騒ぎだったそうだ。春治との祝言が決まったと聞いたおきぬは狂ったように怒り、嫁に行くなら幸助のところだ。牛の春治なんかの嫁になるならいっそ女郎に売ってくれ、死んじまってもいいんだ、と喚き散

らしたという。おきぬの父が、小作の娘が庄屋の嫁になれるわけがないと諭しても、おきぬは聞く耳持たず、幸助が嫁にすると約束したと言い張り、一晩中泣き叫んだという。たしかに幸助には覚えがあった。最初におきぬを誘ったとき、「俺の嫁になれ」と言ったのだ。まさか真に受けていたとは。

夜が明けて、おきぬは家から飛び出して行方がわからなくなった。これも後でわかったことだが、おきぬは産婆のトメ婆さんのところに駆け込んだという。そして、子どもを今産ませるか、できないなら堕ろしてくれと迫ったらしい。婆さんは、おらは中条流の医者ではないからどつちもできないと突っぱねた。するとおきぬは思い付く限りの悪態をついて出て行ったという。

村人はみな楽しんでた。なにしろ地主がらみの醜聞だ。これからどうなるのか、誰が貧乏籤を引くのか、地主がどんな金の使い方をするのか、知らん顔の虎視眈眈で様子を伺っていた。しかしこれは単なる始まりに過ぎなかったと後にわかる。

翌日、おきぬの死体が溜池で見つかった。身を投げたのだと言う者もいたし、トメ婆さんに言われた通り下腹を冷やして子を堕ろそうとしているうちに失神したのだと当て推量で言うものもあった。死人が出たことから騒ぎは大つぴらになり、それまで小声だった噂話が大きな声に変わった。ますます萎縮したのは幸助で、家人とも顔を合わせられず自室の六畳間から出て来られなくなってしまった。

警察署長自らが出張ってきて「これは事故だ」と宣言し、死体はその日のうちに急いで土葬された。もちろん裏で幸助の父が動いていたのは確かなことだろう。死体が妊娠していたことなど報告書には一字も書かれていなかったからだ。署長によれば事態はこれで幕引きになるはずだった。

牛の春治にはすべてが理解できなかった。自分の祝言のために潰けられていた大根脰がおきぬの葬式で使われ、蒸かしていた饅頭も葬式で配られて、約束されていた祝言の衣装合わせも延期になった。父の泰治は何

の説明もせず、ただ「もう祝言は無しだ」と言っただけ。よくわからなかったが、春治は五十銭もらって喜び、村の家々を回って「嫁は来ないが金もらった」と言っただけ。

この事件は近郷近在はもちろん町にまで聞こえた。そして主義者という亡国の逆徒たちが村に入ってきた。痩せこけた書生のような連中だ。小作人に野良で話しかけ、あるいは家まで入り込み何事か熱心に説いた。ほとんどの小作人は連中を相手にしなかったようだが、それは表向きで、二、三日もすると人権やら小作人組合といった言葉があちこちで聞こえ始めた。主義者たちの活動は大胆になり、三日後に寺山の広場で集会を開くから皆来てくれと知らせ始めた。

幸助の父は村の状況を警察署長に逐一報告していた。幸い今年は豊作で、小作でも食うに困らないが、これが凶作の年だったら小作人組合どころか一揆、打毀しにもなりかねない。主義者たちが広める危険思想を村から一掃しなくて夜も眠れない。そのためには予てから親しくしている署長に頼るしか手がなかった。

署長は計画を立てていた。寺山の集会を警官隊に襲わせ、首謀者、つまり主義者の連中を一網打尽にするというものだ。幸助の家では警官隊へ差し入れる食料の準備を始めた。

ところが集会前日の朝、警察が村に入る絶好の口実が出来てしまった。幸助の家の門扉に誰かが「人殺シ封建地主ノ家」と墨痕鮮やかに大書したので。これは主義者の仕業に間違いないと警察は判断した。器物破損であり治安を著しく紊乱する行為である。即座に警官隊が村に導入され、半日がかりの捕り物の末、主義者のほぼ全員が捕まった。ここまでが去年のうちの出来事だ。

年が改まった元旦、朝早く正月飾りを点検に行った飯炊き爺が、門の真ん中に下腹を割かれた雌鳥が吊り下

げられているのを見つけた。足には荷札が付いていて「オキヌノ雑煮用」と金釘流で書かれていた。家中の騒ぎになりかけたところ、父が鶏を裏に埋めると言い、今朝は何もなかった、誰も何も見なかった、良い一年が始まるぞと大喝した。それで家内は落ち着いたが、幸助だけは不安が増す一方だ。事ここに至っても父はまだ何も言わない。常と同じように幸助に接している。不気味でたまらなかった。

元旦から署長が年始に来た。それも夜半になってからだ。幸助はそつと廊下に身を伏せて聞き耳を立てた。二人はまず新年の挨拶をし、父が「年賀の品です」と署長に何か渡した。畳を滑らすガサガサという音がしたので紙包みだろう。署長は「いや、これは」と言いながら鞆に収めたようだ。署長は今朝の出来事をすでに知っていて、容易ならん事態になりかねない、主義者は全員捕まえたのにこのような事件が起きるとは、小作人中に思想が広まっているに相違ない。かといって小作人を片端から拘留して取り調べるなど、ますます反発を買っただけだ。ここはひとつ我慢して様子見に徹するべきだろう、との判断を述べた。他に妙案はないので、父も署長の意見に従うことにしたらしい。

以後、正月は無事に過ぎそうな気配ではあった。ところが松が取れた七日、七草粥どころではない事件がまた発生した。中庭の米蔵の周りで大量の鼠が死んでいたのだ。優に二百匹はいただろう。家の外の道では死んだ鼠を食べた犬と猫も数匹死んでいた。村人は幾重にもなつてこの光景を見ながら不安そうな顔をしていたが、その視線の先には米蔵の壁に書かれたには「地主ノ米ハ毒入」という文字があった。

ここは警察を呼ぶべきかどうか、父は悩んでいた。呼べば事件になって、また一悶着起きるだろう。呼ばなければ地主が泣き寝入りする醜態になる。結局父は警察には知らせたものの警官隊の出勤や事件の調査は断った。そして家人に言いつけて鼠、犬猫の死体を片付けさせ、飯炊きをにわか左官にして壁を塗り替えて文字を

消させた。幸助は誰にも見つからないように厠の窓から全部見ていた。これはもう自分だけの問題ではない、村をあげての戦争みたいなものだと感じ、できることなら消えてしまいたい気持ちになった。

その日の夕餉の席で父が突然言った。この家を継ぐのは長男の正助である。次男の二助は正助を補助しつつどこかに勤めて身を立てる。正助と二助は尋常小学校高等科まで出したからここで暮らすには充分だ。ところで三男の幸助は中学まで出してやった。将来学者にするためである。そろそろ東京へ行って高等学校なり大学予科なりに入って大学を卒業せよ。何を勉強するかは幸助に任せる。中学の校長によると、幸助の成績は群を抜いて優秀で、帝大でも金時計間違いないとのことだ。我が家から高名な学者が出るのは喜ばしい。早速明後日の汽車で東京へ行け。

否も応もなかったし、ちょうどここから消えたい気持ちでもあった。最初は父が俺の面子を立ててくれたと嬉しかったが、よく考えてみるとそうではなく、中学を卒業しているのをいいことに、高等学校受験を口述にして幸助を厄介払いするだけのことだ。それでも村に居続けるより千倍もいい。ただ問題は高等学校に入れるほどの成績か、ということ。さらに、これから勉強する気もまったくないことだった。なにしろ中学の卒業席次がびりから三番目で、幸助より下の二人は留年していたのだ。校長が言った「群を抜いて優秀」とは、あくまで学籍簿のことだ。

身の周りの品を詰めた行李三個はすでに用意され、あとは数少ない勉強道具を纏めるだけになっていた。汽車の切符も手配済みだった。下宿先も決められていて、前家賃は為替で送ってあった。父がいつから幸助の東京行きを準備し始めたのかわからないが、鼠が死んだ今日の今日からではないだろう。もしかすると去年のうちに始めたのかもしれない。幸助は変なところで父の偉大さ、先見の明を感じたものだ。

下宿

次男の二助を介して、父から今月の生活費として二十円受け取った。それに加えて母が当座の費用にと十円くれた。合計三十円、こんな大金を持ったことはなかった。下宿にかかる毎月十五円の費用はすでに家から瀬戸物屋夫婦に送られているから、この三十円は幸助が自由に使える金だ。そして、今後も毎月二十円が手に入る。どこか大金持ちになった気分がした。

汽車が上野駅に着いたとき幸助は仰天した。こんなに大勢の人間を一度に見たことがなかったからだ。みんな忙しそうに駅の出口に向かっていく。ほとんど急ぐことのない村の人々とはまったく違っていた。まるで別世界だ。幸助は少し眩暈がして胃のあたりが気持ち悪くなった。

いろいろな雑誌で東京について読んでいたこともあり少しは知っているつもりだったが、見ると聞くとは大違いで、東京は幸助の想像を遥かに超えていた。とても変な気持ちにしたのは田畑がどこにも無く山が見えないことだった。これでは息が詰まってしまふ。道の両側には二階屋が隙間無く連なり、空き地はほとんど無く、人々の言葉は早口で聞き取れない。それに東京ではどんな人も三食とも米の飯を食って地主のような贅沢な暮らしをしているらしいし、人々の風貌は垢抜けている。幸助は村では役者の落とし種などと持ち上げられていたが、東京ではまったく通用しない。地主の子という、いわば特権階級だったのも田舎でのことで、東京では並みの人、いや、ただの山出しのどん百姓でしかない。幸助は、もはや自分には誇るべき何物も無いこと

を思い知った。これで勉強でもできればいくら救われるだろう。しかしそれも違った。

下宿してから十日ばかり過ぎた。幸助は何もせずと下宿にいた。あまりに大人しくしているので階下の老夫婦が心配し始めた。いくら勉強熱心でも、せっかく上京したのだから少しは息抜きで盛り場に行けばいいだろうと大家の老夫は思ったらしく、朝食の後で幸助を階下に招いた。

「若いもんが勉強はつきりしてると体壊すぞ。浅草でも見物したらどうだね」老夫は言った。「それとも勉強の本でも買いに神田に行くか。行き方あ教えてやるから」

幸助も、さすがに何かしなければいけないと考えていたところだったので、小さくこつくりと頷いた。

「そうかそうか。まず浅草だな。鶯谷から省線で上野に出て」と老夫は広告ビラの裏に鉛筆で道順を書いてくれた。老母は「三円以上持つてつちやいけないよ。掏られたらおしまいだからね。がま口はずつと握ってるんだよ」と忠告してくれた。

浅草は、東京という別世界の中の、そのまた別世界だった。世界中の面白いものが全部ある。食いたい物は何でも食える。それも五銭や十銭でだ。食堂に入って何か注文する口をきくのが怖い幸助も、屋台なら気楽に食えた。屋台で稲荷寿司とてんぷらと団子を食って、二十銭でお釣りがきた。何より驚いたのは凌雲閣の十二階で、八銭出して昇ってみると本当に雲の上にいるようだった。雑誌に出ていたエレベーターというものに乗りたかったが、故障中で階段を上がった。そのほうが良かった。二階から上には外国の品々が売られていて、見て回るだけでも楽しかった。

夕方、暗くなるまでまで浅草にいた。活動写真も見たいし花屋敷の観覧車にも乗りたい。朝までいてもいい気分だが、また来ればいいと思い直して市電の十一番に乗って上野に戻った。今日は充実していた。東京の息苦しさも一挙に消えてしまった。

省線に乘ろうと駅に向かうと、道端に蓆敷きの本屋が出ていた。アセチレンランプを灯し、色とりどりの表紙を並べている。面白そうなので近寄ってみると、まず目に入ったのが「帝都交通詳細」という縦長の地図だった。中には省線と市電の地図があり、帝都の各名所が挿絵付きで載っていた。これはもちろん買うことにした。店番の目つきの悪い男に地図を差し出したとき、ランプの影になった場所にある小型の本に気付いた。「全解・帝国高等学校入学試験問題」という題だ。手を伸ばして取ろうとすると、店番の男がそれを制して言った、「あんちゃん、高等学校を受けるのか」

幸助は頷いた。すると男は「この本にはなあ、試験の問題が答え付きで全部載ってるよ。だから秘密出版なんだ。読んだら誰でも合格するからな。欲しいか」

幸助はまた頷いた。

「よし、特に売ってやる。秘密だぜ。本当は十円なんだが、いくら持つてるんだ」

握り締めていた財布から五十銭札を四枚出して見せた。「なんだい二円かよ、しょうがねえなあ。それでいいよ。でもな、秘密出版だから他人に見せちゃいけないぜ。懷にしまつて家に帰ってからゆっくり読みな」

幸助はまた頷いた。地図と合わせて二円十銭だった。

下宿の自室で、あたりに人がいないのを確かめてから、早まる鼓動を抑えて秘密出版の本を読み始めた。前書きによれば、帝大某博士が高等学校入学試験問題を精査し、重要な百問を抽出して解答を加えた、となっている。

第一問…体操後二体表面力ヲ潤出セル体液ヲ何ト謂フ 解答…アセ

なんだ、こんな程度か、と幸助は思った。高等学校に入れそうだ。

第二問…月二至ル行程ハ 解答…歩ケヌ

第三問…二間ノ竹竿ヲ四本ツナギニテ直立セシムルト如何 解答…折レテ倒レル

入試には頓知も出るのだろうか。幸助は少々怪しくなった。少し飛ばして読むと、

第三十六問…帆船ガ風上ニモ進ム理由 解答…船頭ノ腕前

第五十五問…前人未到ノ地ニ最初に到達セシ人物ハ誰 解答…誰モ行ッテイナイノデ前人未到

さすがにこれはインチキだと気付いたが、案外面白かったので最後まで読んでしまった。そして最後のページには売価十五銭とあった。

露天の男に騙されて二円取られてしまった。きっと田舎者と知れたからだろう。これから外出時には東京人のような顔をしていよう。鏡に向かって東京人の顔を作ってみたが、どうやっても田舎者にしか見えなかった。

入試問題集はともかく、十銭の地図は非常に役に立ちそうだった。特に市電路線図は、浅草へ乗って行った十一番は逆方向だと小川町にも行っていて、少し歩けば本屋街だ。小川町で下りなければ新橋や品川にも行ける。銀座へ行きたければ、いったん雷門に出て、そこから十二番か十四番に乗ればいい。東京のどこへ行くにも市電に乗りさえすれば済むのだ。それに市電はどこまで乗っても七銭だし、車掌に行く先を言う必要は無い。省線より何倍も気楽だった。

幸助は翌日こそ下宿でおとなしくしていたものの、それから連日のように市電旅行を始めた。銀座、新橋、宮城、神田の古本屋街はもちろん新宿、渋谷、足を伸ばして創建間もない明治神宮等々、上野か雷門から行ける名所はほとんど回った。

二ヶ月もすると、幸助は東京がすべてわかった気がした。市電の系統番号は暗記したし、浅草のどこの屋台が旨いかもわかった。誰かが上京して来たら好きなところに案内できる。もう立派な東京人のつもりだ。その

一方、考えたくない悩みもあった。どうやって勉強するかだ。中学の教科書は持って来ていたが、到底それだけで済むはずはないだろうし、といって、受験のために何を勉強すればいいのかわからない。一体どんな問題が出るのか、そもそも受験の出願はいつ、どこにするのか、それもわからない。調べればいいのだろうが、調べる方法もわからない。もう手も足も出ない薬缶のタコだ。東京の言葉をきれいに話せたら全部解決するのだが。

受験のための補習を行なう学校があるのを幸助も知っていた。どこかの雑誌に出ていたからだ。幸助はその学校の門の前まで、どうにかたどり着き、入学を申し込もうかと迷った。そして迷ったまま何もせずに帰ってきてしまった。どうも気が重いのだ。俺の言葉は通じるだろうか、補習の内容がわかるだろうか。後悔しても始まらないが、中学でもう少しまじめに勉強しておくのだった。田舎の中学でおしどりの行列にも足りなかったのだから、水準の高い東京の中学を出た奴に敵うわけがない。大体、俺のような卒業成績では高等学校や大学予科の試験を受ける気になる奴はいないだろう。

そして下宿で虚ろな時間をつぶし、市電で東京巡りをする日々が続いた。

紅提灯

いつしか冬が終わり春になった。さすがの幸助も市電には飽きてきていた。盛り場に出かけても、それほど面白くなかった。浅草の瓢箪池だったたの池だし、十二階にしても本当は雲よりずっと低い。観音様の裏手にある怪しげな一帯にも行って見たが、白粉臭い女に話し掛けられて、答えるのがいやなのでそのまま帰ってきた。田舎にいた頃には吉原に行きたいと思っていたが、話をしないといけないことがわかって、最初から行く気になれなかった。どうしたら訛りが直るだろう。自分を田舎で産んだ両親を呪った。

このごろでは週に一度くらいしか市電に乘らなくなり、代わりに谷中界隈をうろつき始めた。墓地を横切つて線路を見に行くと、崖下に山手線と東北線と常磐線が並んで走っている。レールが六本も並んでいるのを初めて見た。蒸気機関車に引かれた長い貨物列車も通る。崖つぶちに腰掛けて朝日を吸いながら下に行く列車を見ていれば面倒なことは全部忘れられる気がした。

線路から向こうに目をやれば東京の下町が一望できる。見渡す限りずっと建物が連なっていた。あの全部に人が住んでいるのかと思うとどこか空恐ろしい。みんなせつせと歩いて、働いて、雨でも晴れでも気にせずに、きつと悩みなど無いのだろう。村とは大違いだ。俺も東京に生まれたかった。

崖つぶちを北の方向に歩くと、突然墓地が終わって急な下り坂になり、崖下に降りるとそこには日暮里の駅があった。東京の駅にしては田舎臭い駅だ。それでも山手線は止まるから、今度乗るならここからにしようと思った。六本の線路の向こう側にも駅舎があるようだ。というか、あちら側のほうがごみごみして賑わっている。

るようだ。幸助は線路を渡らずに駅を背にし、坂を上って西の方に歩き始めた。かなりの登り坂だ。坂の途中の左側に「谷中煎餅」と看板を出した店があった。丸い醬油煎餅が何種類かガラス瓶に入っていて、とても旨そうだったから厚焼きを五枚買った。道の反対側には花屋という菓子屋があつて饅頭や団子が並んでいた。その並びは洋菓子とパンの丸十という店で真つ白なケーキが目に入った。いつか一番大きいのを買おうと思った。煎餅を齧りながら坂を上ると、右側の佃煮屋からの醬油の匂いが道まで香っている。ガラスの入れ物には、ここで作った佃煮が何種類も入っていた。小さな海老を串に刺した鬼殻焼が旨そうだ。下宿への土産に十本買った。

佃煮屋の十字路を左に入れば下宿に帰れる。しかし幸助は真つ直ぐ行ってみることにした。数歩歩くと、そこには信じられない景色があつた。道が幅の広い階段になって下っていたのだ。そして階段の上に立つと、遠く富士山まで見通せる。ちょうど日は暮れかかり西の空は茜色に染まりつつあつた。右から左まで夕焼けの空だ。富士山は黒い影になって中央左寄りに大きく写っていた。幸助は立ち尽くした。煎餅を食うのも忘れて真つ暗になるまで西の空を見ていた。東京に来てから初めて出会った美しい景色だった。

何故だかわからないが幸助は勉強する気になった。受験に役に立つか立たないかは別として、中学の教科書を最初から読み直し、わからない箇所は懸命に考えて解答にたどり着いた。やる気でやってみると勉強は案外楽しいものだ。中学時代にどうしてこれがわからなかったのか不思議な気もする。

幸助はもう出かけなくなった。出かけても谷中墓地や日暮里の階段あたりへの散歩で、市電に乗るわけではない。下宿の老婆は幸助を心配して「お金がなくなったのかい」ときいてくれた。幸助は「あります。勉強してる」と答えた。この程度の言葉なら多少は言えるようになっていた。

桜はとうに散って、昼間は少し暑いくらいだ。炭を入れない火鉢の横で、卓袱台を机代わりにして幸助は中学の教科書を相手に苦闘していた。これだけ勉強すれば来年の入学試験には合格するかもしれない。いや、こんな程度では受かるはずはない、多分だめだろう。気持ちには行きつ戻りつしたが、とにかく勉強するしかない。谷中煎餅を齧りながら夜は十一時まで頑張った。

窓を開け放しておくのに丁度良い季節だ。さすがに都会だけあつて夜の十一時でも様々な物音が聞こえる。一度、何時になつたら音がしなくなるのか知りたくて起きていたことがあつた。夜中の一時ごろになつて、やつと人声が消え夜泣きそばも商売をやめ、かすかに聞こえる列車の音も絶えることがわかつた。東京人も眠ると知って何となく安心した気持ちになり、翌晩からぐっすり安眠できるようになつた。村にいた時より眠りは深い。勉強で頭が疲れているからだろう。

そんな幸助が、ある夜、珍しく夜中に目を覚ました。ざわざわとした物音のようなものが原因だつた。物音なのか人の気配なのか判然としないが、下宿の前の道を通っているようだ、聞いたことも感じたこともない不思議な気配だつた。強いて言えば夏祭りに神社に向かう行列のような、犬の群れが歩いているような、どうにも喻えがたい妙な気配だ。幸助は暗闇で目を開いてじつと聞いていた。気配は段々強くなつた。同時に窓の外がぼうつと紅色に光り始めた。幸助は少し怖くなつた。こんな夜中にお祭りなどやっているわけはない。物売りが夜中に来るはずがない。それとも、まだ聞かされていない谷中の風習なのだろうか。布団にくるまって身動きできないでいた。

紅色の光はどんどん強くなり、窓から部屋の中に差し込んで部屋中が紅色に染まつた。ざわざわした気配も一段と強まつて、話し声も混ざっているのがわかつた。ちよつと甲高い声で囁いているのだが、内容はまったくわからない。掛布団を頭から被つて、早く消えてくれと願つた。気配は数分続いた後にすつと消えた。時計を見ると三時だつた。怖くて眠れないかと思つたが、その後いきなり眠くなり、朝には普段通りに目覚めた。

次の晩は何事もなかつた。その次の晩も大丈夫だつた。幸助は少し安心した。しかし何日か経つた夜中、また紅の光と気配がやつて来た。最初のとくとほとんど同じだが、心なしか窓の近くを通っているような気がした。二度目で慣れてしまつたのだろうか、怖さはそれほどでもない。怖がつていない自分に幸助自身驚いた。今度は布団を被らず、最後まで見届けることにした。時計はやはり三時を指していた。

光の元は紅色に塗つた大きな御所提灯だつた。二、三十個もあつたろうか。窓と同じ高さの空中をふわふわと進んでいた。御所提灯の上には、ひととき大きな丸提灯があり、白っぽい字で三年屋と書かれていた。やはり何かの物売りなのだろうか。ところが提灯の下の地面は真つ暗で何も見えないのだ。明るい提灯の下なら地面が見えてもいいはずなのに、闇の塊が地面を覆っている。塊の部分だけ闇夜のように真つ暗だ。闇は提灯の真下から前後に二十間ほど延び、それから先の地面はごく普通に見えた。

人声とも物音ともつかない音は闇の塊から聴こえてくることもわかつた。ざらざらいう音に甲高い吹き声がかき混ざっている。機械が出す音ではない。といって、なにかの動物の音でもなさそうだ。もつとよく聞こうと窓から首を出したとたん、そら寒い冷氣と生臭い暖気が同時に吹き付けてきた。幸助はあわてて首を引つ込めた。何かを売っている屋台なのだろうか。そうだとしたら、夜中に来たりわざと暗くしているところを見ると御禁制の品物かもしれない。階下の老夫婦は知っているだろうか。

翌朝、朝食の後で、老夫婦に「三年屋は何を売っているのでしょうか」ときいてみた。夫婦二人とも三年屋を知らなかつた。夜中に前の道を通ると言ってみても、「そんなものは見たことない」とのことで、大方夢でも見たんだろう、で済まされてしまつた。幸助がもう少し説明しようともじもじしていると、老母が「屋台なら

見ただけじゃお金は取られないから、見に行ったらどうだい」と言ってくれた。たしかにそうだ。怖がついてるだけでは正体などわからない。自分の目で確かめればいい、と幸助は思った。

そうと決めると皮肉なもので、三年屋は来なくなった。やはり夢だったのかもしれない。慣れない勉強などしたものだから脳に異常を来したのかもしれない。紅色で宙に浮く提灯など、この世にあるはずはないのだ。半分納得できないまま、幸助も夢だったと思うことにした。

梅雨の走りが始まっていた。世の中が暖くなり、道路脇の側溝には糸みみずが群れるようになった。幸助は相変わらず勉強していた。中学の課程をほぼ終えて、どこかで受験用の参考書を手に入れようと考えていた。そんなある夜、久しぶりに三年屋がやって来た。やはり夢ではなかったのだ。もうまったく怖くないといえば嘘になるが、それより近くで見たい気持ちが強い。幸助は見に行くことに決めた。

遠くから紅色の提灯が近付き、言いようのない気配が次第に濃くなっている。忍び足で階段を降り、玄関から道に出た。見上げると、遙か上空にたくさんの提灯が浮き、あたりの空を紅色一色に染めていた。提灯の下はすぐ目の前にあった。完全な暗黒の塊の中はまったく見えない。話し声まがいの物音は闇の中から聞こえている。闇は妖気に近い何かを吹き出しながら幸助の前を少しずつ移動しているようだ。幸助は何も考えず、闇の中に飛び込んだ。

闇は幸助の肩の辺りまでしかなかった。首は闇の上に出ている。深い泥田にはまったような気持ちだ。闇の中に入っている自分の手は見えない。誰かが遠くから見たら、幸助の首だけが紅色の光の中に浮いて見えるに違いない。もやもやした妖気のような気配は気持ち悪いが、どことなく面白い気分になった。

闇の移動と一緒に少し歩いた。踏んでいる地面はいつもと変わらない道路だ。闇の中がどうなっているのか

気になって、幸助は闇に潜ったみた。

無数の小さな子どもたちがいた。みな同じくらいの年齢で、お揃いののだろうか、鼠色の単衣を来て藁草履を履き、闇の中で押し合いへし合いしながら隣の子どもと小さな声で話をしている。ただ、何を話しているのか、幸助にはまったく聞き取れない。これが音の正体なのだろう。無数のびちゃびちゃという話し声と草履の足音が混ざっていた。子どもたちは見えない檻に入れられたように闇からはみ出さず、闇の中にぎっしり詰まって歩いていた。男の子も女の子もいた。手をつないだ瓜二つの子どももいた。あまりの人数の多さに幸助は圧倒された。不思議だった。同じ年頃の子どもが、これほど大勢集まっているのはどうしてだろう。それも真夜中の三時に。

これだけ大勢の子どもが歩いているのに、誰一人として幸助にぶつからない。ひらりとよけているわけでもない。そもそも幸助の存在に気付いている様子もなかった。幸助はときどき闇の上に顔を出してあたりを見ながら闇と一緒に歩いた。どこへ行くのだろう。行き先がわかれば、この三年屋が何なのかわかるかもしれない。見届けることに決めた。

提灯と闇は谷中の町をゆっくりと進んだ。道の両側の家々は明かりが消えて寝静まっている。誰もこの行列に気付いていない。これだけ明るくてにぎやかなのに誰も気付かないのも不思議だ。

しばらく歩くと闇の先が左に曲がり始めた。左は墓地のはずだ。墓地を通ってどこかへ行くのだろうか。提灯も揺れながら左に向きを変えた。幸助も闇に従って左に曲がったそのとき、目も前に銀色に光る大きな門が見えた。

一平

門は鈍く銀色に輝いていた。浅草寺の仁王門に似ているが、遥かに高く大きかった。門の向こう側には提灯と同じ紅色の光が眩しいくらいに満ちていた。この辺は散歩で歩いているが、こんな門は見たことがない。ここは一体どこなのだろう。幸助は動けなかった。闇と提灯は門を潜って中に入って行ったが、幸助は立ち止まって見送ることにした。

提灯と闇はまばゆい紅色の光に飲み込まれて見えなくなった。門に入る勇氣はない。ただ見つめているだけだ。すると光の中から小さな黒い影がこちらに近付いてきた。幸助に向かって走って来るようだ。影は門の真下で立ち止まり幸助を手招きした。何故か怖さを忘れて、幸助は門に近付いた。そのとき影は言った。

「おとう」

この子どもは何だ。どうして俺をおとうなどと呼ぶのだ。俺には子どもなどいない。

「おとうだろ。幸助だろ」更に子どもは言った。

俺の名前を知っている。こいつは何者なんだ。幸助は恐ろしくなった。

「幸助だ。俺は幸助だが、子どもはない」声が震えて裏返っていた。

「そうかい、じゃあ説明するから大声で叫ぶのはやめてくれ。夜中だし。声に出さなくてもいいんだ。ただ考えれば俺にはわかるから。やってみなよ」

声に出さなくてもわかると言った。そんなことが出来るのだろうか。とりあえず試してみよう。上ずった声

を出すより多少は恰好もつく。

〈お前は誰だ〉

〈だから、おとうの子どもだよ。かあちゃんはおきぬだ〉

〈嘘だ。おきぬは子を産む前に死んだ〉

〈そこがややこしいんだ。俺はおとうの子だけど産まれちゃいない。それでこうなった〉

〈こうなったって、どういうことだ〉

〈俺は産まれていないから死んでもいないんだよ。産まれなきゃ死ねないだろ。それで宙ぶらりんに娑婆に引かかっている〉

そうか、おきぬは死んだが腹の中の子どもは「死んだ」わけではないのだ。えらく面倒な話だ。

〈面倒なんて思わないでくれよ。俺だって好きこのんで引かかっているわけじゃないんだから〉

〈これは油断できない。考えることが簡抜けだ。お前は幽霊か〉

〈やだなあ、そんなじゃないさ。生きてたことがないものが幽霊になれるかよ〉

〈それならこの世のものか〉

〈強いて言えばそうなる。この世のものかあの世のものは三年後に決まるんだ〉

〈よくわからん〉

〈わかんなくていいよ。それより俺を連れてってくれ。おとうと一緒にいきたいんだ〉

〈俺と一緒に、どこに行くって〉

〈どこでもいい、ここじゃなきゃ、どこでもいい。絶対に邪魔はしないから連れてってくれ〉

いきなり自分の子どもを自称する小さな化け物が現われたら、誰だって困惑する。幸助もどうしてよいやら

判断がつかなかった。

〈朝まで考えてる気なのかい。俺は付いてくよ〉

そう言っただけでも幸助の左肩に跳び上がった。子どもに乘られても重さはまったく感じなかった。振り落とす理由もないので、とにかく乗せておくことにした。子どもは肩の上でちょこんとしゃがんで、オームか何かの鳥が止まっているようだ。

〈おとうに言っとく。俺の姿はおとうにしか見えないよ。こうやって声に出さずに話してるのも誰にも聞こえない。それに俺は、おとうに代わって話すことも考えることもできる。さあ、下宿に帰ろうよ〉

〈ああ〉

幸助が帰ろうと振り向いたとたん、背後で銀色の門が掻き消え、紅色の光も急速に衰えて、ふた呼吸くらいの間にいつもの墓地に戻っていた。

〈消えたぞ〉

〈三年屋はもう店仕舞いだ。またいつか開店するはずだよ〉

〈おい、一体全体どうなってるのか教えてくれ。頼む〉

〈そんなに知りたいか。まあ一応親だからな。知ったときたいのも無理はない。じゃ、そもそもから話してやる〉
下宿に向かって歩きながら、子どもはこんな話をした。

母親の腹の中で母親と一緒に死んだ子どもは四十九日までは母親といられる。その後、母親はあの世に行くけれど、子どもは現世に籍が無いのであの世には行けない。そこで、現世に産まれ直すか最初からいなかったことにするかを決めるために父親を探すことになる。うまく父親に巡り合えて三年間親孝行すると現世で生きて行けるようになる。運悪く父親に会えなければ最初からいなかったものとして抹消される。父親を探せる期

間は三年間と決まっている。

〈だけどね、子どもが一人で父親を探すのは難しいから三年屋に頼むんだ〉

〈あれか、紅色の提灯の〉

〈そうだよ。目立つだろ。三年屋はどうしてだか知らないけど、子どもの父親の居場所を知ってるんだ。それで、わざと近くを通っておびき出す、いや、誘い出すわけだ。今夜おとうが出て来たみたいに〉

〈畏にはまったっていうわけか〉

〈人聞きが悪いな。まだ見ぬ我が子と奇跡的に再会したくらいにしといてくれよ。俺は父親と会えて一緒に連れて運が良かったと思ってるよ。会えない子どもも大勢いるし、会えても断られることもあるからな〉

〈断るって、なんだ〉

〈俺がさっき、おとうの肩に跳び乗ったとき、おとうは振り払わなかったら。もし振り払われていたら、そりゃ断られたことになるんだ。そうすると三年屋の行列にも入れてもらえない。銀の門の両側に吉原の張店みたいなのがあったの、見たか〉

〈いや、門の大きさに驚いただけだ。そこまで見てない〉

〈あるんだよ。その中に入られて、父親が偶然通りかかるのを待つだけになる。悲惨なもんだよ。まず父親は来ないから、三年後には消滅さ〉

そんな話をされても、まだ夢を見ているようだった。これは悪夢だ。上京する前に、せめておきぬの墓に線香の一本も上げておくべきだった。

〈かあちゃんは関係ないよ。あの世の上の方に行ったか下に落ちたか知らないけどな。そうそう、ひとつ言っとこう、かあちゃんはおとうを本当に好きだったんだ。知ってたか〉

幸助は何も言えなかった。言うべき言葉が見つからない。とても重い罪悪感があるだけだった。今更ながら、おきぬには本当に申し訳ない思いで胸がいっぱいになった。

〈済んだことだよ。その分、俺をかわいがれ〉

〈悪かった。お前にも悪いことをした。剃髪したい気分だ〉

〈馬鹿言ってるんじゃないよ。おとうの生臭坊主なんぞ見たくない。それより一高に入れよ〉

〈入れるわけないだろう。俺の成績、知ってるか〉

〈この上なく酷いの知ってるけど、任せとけ。俺が入れてやるよ。請合ってもいいぜ。ところでさあ、俺はまだ名前が無いんだ。これからずっとお前って呼ぶのかい〉

〈それでもいいけど、名前が欲しいか〉

〈うん、簡単なのでいいから〉

〈それでは、そうだな、一平でどうだ〉

〈長男だし、一平でいい〉

幸助は一平を肩に乗せ、無言で話しながら下宿に戻った。やはり親子だ。一平とは馬が合う気がした。妙な具合になったが、何故か嬉しかった。

賭場

朝、寝不足のまま朝食に降りて行くと、幸助の口から「おはようございます」ときれいな東京弁が出た。老夫婦も、言った幸助自身もびつくりした。左肩の一平はにたにた笑っている。

〈何の真似だ〉

〈いいじゃないか。東京弁、話しかかったんだろ〉

「おやまあ幸助さん、いつ訛りが直ったのかね」老婆が嬉しそうに言った。

「はい、ずっと練習していて、二、三日前から少しづつ」これも一平が言っている。

「赤飯炊くほどじゃないが目出度いな。あと服装だけ何とかすりや田舎もんには見えねえ」

「さあ、ご飯を食べて、話はその後で」

納豆とお新香と味噌汁の朝飯が済んで、老夫が煙管に煙草を詰め始めたとき幸助が言った。いや、正確には一平が言った。

「あの、折り入ってお願いがあります。私に一高の制服と制帽を買って来ていただけないでしょうか」

夫婦は顔を見合わせた。

「まあいいけどなあ。まだちょっと早いんじゃないか」

「私は中学を出てから二年遊んでいたので、年齢からしたら着てもいいと思うんです。それに、来年は一高に受かるのが決まっていますから」

老夫婦は、これまでの幸助を見ているから、それほど出来の良い若者とは思っていなかった。それが一高に入るなど、信じるほうが無理だった。

「だがな幸助さん。試験は水物っていうから、やってみなくちゃわからねえのはたしかだが」

「そうですけど、十中八九、いえどんな天変地異が起きても入れます」

「そうかねえ。まあ買ってあげようかね。天ぷら学生も悪くないかもしれないし。ねえおじいさん」

老夫は腑に落ちない顔をしていたが、老婆は、別に罪になることでもないとききらめたようだ。

〈なんでこんなこと言い出すんだ〉

〈おとうの立場を固めなくちゃ。学生服は強いぜ〉

幸助は老婆に二十円渡して、「これで間に合うでしょうか」と言った。もちろん間に合うに決まっていた。

日比谷図書館には神田の本屋を全部集めたほどの本があった。一平が幸助の中学教科書を見て大笑いしたのでやって来た。一平は中学の教科書など、まるで謎々だ。こんなもんで苦労するなんて、おとうはどうかしている、と言うのだ。俺が付いてればどんな難しい問題だって、おとうはわかるよ、とも言った。それなら試してみようとなって日比谷図書館に来たのだ。

〈どの辺の本を見ようか〉

〈どこでもいい、おとうが難しくて絶対に読めないと思う本がいい〉

〈それなら代数だな〉

数学の本が並んでいる一角に来て、題名すらわからない本を探した。実は探すまでもなく、大半の本がそうだったが。幸助は定積分と不定積分という一冊を取り出して立ち読みを始めた。ほら、やはり全然わからない

じゃないか、と思った瞬間、全部わかった。一点の曇りもなく明快にわかった。ページをめくるだけで、その

ページの内容が理解できた。

〈な、わかったかい〉

物理や化学の本も試した。まるで今まで知っていたかのようにすべてを理解できる。語学もそうだった。英語、独逸語はもちろんアラビア語も読める。俺の目と頭はどうかなってしまっただろう。

〈どうもなってるないよ。俺が読んで、おとうにわかるように伝えているだけだ〉

〈すごいな一平。どういう魔法を使っているんだよ〉

〈魔法じゃないぜ。俺たちは、そう、おとうもそうだが、みんな最初はわかってるんだ。ところが母親から出て娑婆の風に当たったとたん、全部忘れちゃうのさ。それで最初から勉強し直す。難儀だね〉

これもまたにわかには信じ難いが、一平がそう言うのならそうなんだろう。

〈じゃ、一平は何でも知ってるんだ。わからないことは無いのか〉

〈まあね。でもわからないことも五万とあるさ。自分のことはよくわからないんだよ〉

〈そんなもんかな〉

〈ああ、そんなもんだ。ところで、おとうは外国語の字も書けるって知ってたか。書けなきゃ試験に受からない〉

〈そうだな、それも一平が教えてくれるのか〉

〈やってみようぜ。ノートと鉛筆出してみな〉

幸助の右手がすばやく動き始めた。ノートには見たこともない字が並んでいたが、一呼吸後に発音も意味もわかった。ヘブライ語で聖書の一節だった。

図書館は早々に引き上げて上野に戻った。一平さえいけば怖いものなし。これ以上勉強する必要もない。一高だけでなく英国の大学にもすぐに入れる。幸助は重荷が取れて一気に楽になった。空もきれいだし街は華やいで見える。上野がこんな楽しい街とは知らなかった。

〈おとう、浮かれてないで金儲けしよう〉

〈金ならある〉

〈今朝の制服代、稼ぎたいと思わないか。懐に五円あるだろ、それが元手だ〉

〈何するつもりだ〉

と思う前に、幸助は電柱の影にいる小男に近付いていた。

「こんにちは。お願いします」と小声で言っていた。

小男は幸助を上から下まで眺め回した。

「あんちゃん初めてだな。どこで知った」

「それはその、蛇の道はヘビで。お兄さんを見たらわかりました」

「そりゃ物騒だ、警察にもわかるってことじゃないか。ま、いいや。いくら持つてる」

「五円です」

「初回ならいいだろう。で、やったことは」

「はい、田舎で少々」

「いいよ、付いて来な」

狭い路地に入って、その奥で曲がり、人が一人通れるだけの隙間を抜けると入り口があった。入り口には別の男が立っている。かなりのギョロ目だ。小男が「お客さんひとりご案内」と囁くと、入り口の男が幸助を品定

めして、「どうぞ」と中に招き入れた。入ってすぐの一階には数人の若い男が禪ひとつで寝転がったり将棋を差したりしている。大きな卓袱台には握り飯がいくつもあった。

「どうぞ二階へ」

猿梯子を登った二階は暗かった。部屋の中央に天井からぶら下がった電球がひとつ。その下には畳が一枚置いてあり、十人ほどの男たちが畳を囲んでいる。世話役らしい若い男が、幸助を人の輪に入れて座らせた。

ガラッポンだった。こういう賭場があるとは聞いてはいたが見るのは初めてだ。部屋は熱を帯び、男たちの殺意のような気合に幸助はかなり怖気づいた。一平は面白そうに部屋中を見回していた。

最初の三回は賭けなかった。目は半、半、丁と出ていた。次に幸助は半に三円張った。一平がそうさせたのだ。目は半で当たった。もう一度、半に一円張った。今度は丁と出て取られた。

〈おい、外れたぞ〉

〈いいんだよ。わざとやってるんだから〉

〈わざと負けることはないだろう〉

〈最後は勝つから任せてよ〉

勝ったり負けたりしながら三時間ほど過ぎた。手元の金は十四円になっている。

〈そろそろ終わりにするからね〉一平はそう言つて、長に五円賭けた。出目は半で、これは取られてしまった。

幸助は少し後ずさりして、小声で「遊ばせていただきました」と言い、席を立った。懐には九円ある。四円の儲けだ。猿梯子を降り、入るとき入り口にいたギョロ目男に「お世話になりました」と言つて二円渡した。男は幸助の顔を穴のあくほど見つめて、「どうもご丁寧に。親御さんのお躰が良らしいようで」と笑った。これで儲けは二円になってしまった。

〈せっかく儲けたのに、ばら撒くのか〉

〈挨拶だよ。どこでも挨拶は大切だろ〉

そして帰りには電柱の影の小男にも「やすけでもやってください」と祝儀を一円渡した。小男は大喜びして「さぞ儲けなさったのでは」ときいてきた。幸助は「お蔭様で大損はしませんでした」と答えた。

〈おい、儲けは一円だけになったぞ〉

〈元手が減らなかつただけで由とすべきだよ。これで顔がつなげたんだから〉
そんなものか、と幸助は思った。一平の奴、かなり世慣れているようだ。

その後、週に三回くらいは上野の賭場へ通った。大儲けもせず、大負けもせずで、均せば週に十円くらいは儲けていた。若い連中への祝儀も欠かさなかつたので、誰に睨まれることもなく、「坊ちゃん」と呼ばれるようになった。

予 感

一平が幸助に約束させたことがひとつあった。絶対に酒を飲まないことだ。酔ってしまったは一平の言う通りに動けなくなる。お互いにそれは困るのだ。幸助に飲酒癖は無かつたので禁酒も苦ではなかつた。しかし飲むと言われると飲みたくなるのも人情で、幸助は酒の代わりにラムネを大量に買って井戸で冷やし、毎日馬のように飲んでいた。ラムネでは酔わないが、そのうちガスが腹に溜まって破裂するような気もした。

なにより暇だった。勉強もしなくていいし金にも困らない。暑いので出かけたくもない。下宿でごろごろし、気が向けば賭場へ通う毎日だ。幸助にわかつたことは、博打は負けるかもしれないから面白いということだった。必ず勝つのだから緊張感も何も無い。どう勝っても、いくら負けても平然としている幸助を、賭場の連中は度胸が良いのと勘違いし、あの坊ちゃんは有名な博徒の一人息子だという噂まで立った。

俺はこのまま、暇すぎる一生終わるのだろうか。

〈おい一平、暇だな〉

〈俺のせいじゃないよ。暇すぎるなら右手と左手でじゃんけんでもしたらどうだ。猫だったら自分の尻尾で遊べるぜ〉

〈残念ながら人間みたいだ〉

〈それも俺のせいじゃない〉

〈おい一平〉

〈なんだよ、もう〉

〈お女郎買いに行こう〉

〈いきなり何言い出すのかと思ったら。今日は嵐だ。魔日だよ〉

〈張子の虎じゃないから濡れても平気さ。それに雨のほうが空いてるんじゃないか〉

〈花屋敷じゃあるまいし。大体、行ったこともないのに行けるのかい〉

〈お前が付いてりや大丈夫だろう〉

〈あのなあ、おとう。忘れてるのかもしれないが、俺はおとうの子どもだよ。どこの世界に息子に女郎買いの手引きさせる親がいるんだよ〉

〈いいじゃないか。子どもなら親の言うことを聞け〉

〈やだね。憚り様〉

〈案外旧弊なんだな。もつとさばけてるかと思つた〉

〈悪うござんしたね〉

〈それじゃ、見るだけならどうだ。吉原行つて、ひやかすだけ〉

〈あんまり気が進まないな。でもまあ、本当にひやかしただけならいいかな。絶対に揚がらないからね。しばらくは見納めになりそうだし、行こうか〉

〈見納めつてなんだ〉

〈いいからいいから、出かける支度しなよ〉

幸助は新調した学生服を着ようとした。

〈おとう、やめとけ。金曜の昼日中に学ランで中かよ。天ぷら丸見えだ〉

〈そうかな。一高生はもてると思うが〉

〈揚がらないなら何でも同じだろう〉

下宿の老婆に「ちよつと出かけてきます。夕飯は取つて置いてください」と声をかけ、外に出た。台風だという。風が雨粒を吹き付けて蛇の目を差しても横から濡れた。さあ、吉原に行くぞ。幸助には風雨の音が軍艦マーチのように聞こえた。

雷門から歩くことにした。一平が、最初なんだから古式に従うべきだと主張したからだ。川沿いの道を川上に向かつてゆるゆると歩く。風はますます強くなつて、ひどく歩きにくい。これなら古式でなくてもいいから観音様の裏を抜けるべきだった。そんな天気でも暇人や粹人はかなりいるようで、同じ方向に歩く多くの男たちがいた。

川沿いの道から左に折れ、曲がりくねった衣紋坂を上がると大門だ。幸助は心臓がどきどきしてたまらなかつた。一平は面白くもない顔をしていた。大門をくぐつて真つ直ぐに伸びている広い道が仲之町だ。道の中央には花壇があつて形の良い樹木が植えられ、その下ではきれいな花が咲いている。道の両側には立派な建物が連なり、あちこちにお祭りのような提灯が下がっている。ここが日本一の色を売る街だ。ひどい雨でまだ明るい時刻なのに三味も聞こえる。料理屋の出前持が大きな岡持を提げて雨を避けるように早足で歩いている。

〈さあ、どうしたんだ。さつさと見に行こうよ〉

一平に促されて幸助は歩き始めた。仲之町を中央にして左右対称に街があつた。大門から右側に江戸町一丁目、揚屋町、京町一丁目と続く。左側は大門のあたりが伏見町で、江戸町二丁目、角町、京町二丁目となる。仲之町から左右どちらに曲がっても、建物の一階が窓格子になつていて、中にお女郎さんが並んでいた。みな

きれいに化粧している。村の女たちとは雲泥の差だ。〈化粧を落とせば人三化七だ〉と一平は言うが、別に嫁にするつもりはない。〈野暮なこと言うな〉と思いつながら女性たちを見て回った。

幸助が少しでも「いいな」と感じると、一平は必ず何か言い返した。〈白塗りしてるが、その下はカサツカきだよ〉とか〈嘘つきで性悪の極地だね〉や、〈ケツの毛まで糞り取る守銭奴だぜ〉等々、そう言われてみると、たしかにそうも見えてくるから不思議だ。こういう夢を売る町では一平の千里眼は、かえって仇になる。

多くの女の中でただ一人、西河岸近くの店で、あまりぱつとしないお女郎を見たときだけ、一平は〈この人はいい人だ〉と言った。数人並んだ一番端に座っていた女は、幸助と目が合っても誘う風でもなく、すぐに下を向いてしまった。幸助はじっと見つめた。

〈あの子ならいいんだな〉

〈いいとは言つてない。揚がるなよ〉

〈約束だから仕方ない。名前はわかるか〉

〈ええと、コノハナ、木ノ花っていうんだ〉

〈よし、憶えておこう。この次は京町一丁目に直行だ〉

結局、幸助は吉原中の路地を二度見て回った。まだ見ていたかったが、すっかりずぶ濡れになっていた日が暮れば一平との約束を破りそうな気もした。それよりなにより腹が減った。土手道を避けて吉原病院の横から浅草に出て、寿司を食ってから市電に乗った。幸助はまずまず満足していた。吉原は大体わかった。あとは実際に店に揚がればいいだけだ。

〈おとう、いくらかかるか知ってるか〉

〈百円も要るかな〉

〈あのなあ、身請けしようってんじゃないんだ。そのうち教えるよ〉

帰ってみると老夫婦の夕食は済んでいて、幸助の分は卓袱台の上に蠅帳を被せて取ってあった。老母が味噌汁を温めてくれたので、鰯の干物と佃煮の夕飯を食べ始めた。隣室で老夫婦が何か楽しそうに言い合っているのが聞こえた。聞くとはなしに聞くと、明日の芝居見物に何を着て行こうかという話だった。一平が〈行っちゃだめだよ。行かせるな〉と強い調子で言った。

〈どうしたんだ。何がだめだ〉

〈明日は出かけちゃいけないんだ。二人を止めなきゃ〉

〈何言ってるんだ。楽しそうにしてるのに〉

〈悪いけど、おとう、俺の言う通りにやってもらうぜ〉

幸助は夕飯を放り出して隣室との襖を開いた。

「おじさん、お婆さん、明日の芝居は止めてください。お願いします」

「おやまあ、どうしたって言うの」

幸助は跪いて両手を合わせた。

「出かけたら良く無いことが起きます。わかるんです。死んでしまうかもしれない」

「そんな大げさな。いくら幸助さんの頼みでも芝居は見に行きてえよ。せっかく切符、婆さんが手に入れたんだから。ほれ、二長町の市村座だ。席もいいよ」

「下谷でしょう。ますますいけません。明日だけはだめです。明日以外なら帝劇でも歌舞伎座でも、好きなど

ころの切符を私がいいますから、明日は行かないでください」

「幸助さん、あんたわかつてねえな。こんな良い席の切符、俺たちじゃ一生に一度くらいしか手に入んねえんだ。二枚で大枚十五円のお宝だ。それを捨てろって言うのか」

「明日だけはいけません。十五円で命がなくなつては元も子もありません」

「いつてえ何が起きるって言うんだい」老父は怒り始めた。

「わかりません。ただ、ものすごく悪いことが起きる気がします。私の予感によく当たるんです。堤防が切れるとか、蝗が来るとか、山火事が出るとか、外れたことはありません。だからお願いします」

「知らねえよ、そんなことあ。あんたの予感くらいで止められるもんか」

「ちよつと、お爺さん、幸助さんは必死だよ。ねえ、幸助さん、一体どうなるっていうんだい」

「はい、はつきり言えないのが苦しいんですが、私にもわかりません。ただ、お二人にもしものがあつたら」

「すごく悪い予感がするんだね」

「何か起きます。とんでもないことが起きます」

老夫婦は顔を見合わせた。

「わかつたよ。行かねえよ。俺たちを思つてのことなんだろうから、しょうがねえなあ」

「ありがとうございます。芝居の切符は必ず工面しますから」

「そんなことあどうでもいいさ」

「そうだねえ、歌舞伎座が建て直つたら柿落としても見せてもらおうかね」

「まあ、それでいいか」

東京の人は口と腹が一緒だ。納得してくれたからには安心していられる。とはいえ、老母はまだ切符をちら

ちら見ていた。

翌日、風は相変わらず強かつた。昨日の大雨は止み、時折小さな雨粒が落ちる程度に回復していた。朝食は何となく気まずい雰囲気で、誰も芝居の話をしていない。一平の奴、えらい騒ぎを起こしてくれたものだ。市村座の切符を買い直すのは、上野の賭場に入りにしている顔役に頼めば造作も無いことだろうが、今日何も起きなければ騒いだ分だけここに居辛くなる。腹でも切ればいいのかもしれないが、そうも行くまい。一平の言つた通りに悪いことが起きるといふ気持ちと、何も起きるなという気持ちを半々に、早々に朝食を切り上げた幸助は二階でごろごろしていた。午前中は何も起きる気配はなく、そろそろ昼になろうとしていた。老母が昼食の用意を始めたようだ。暑いから素麺でも茹でるのだらう、鍋に水を張る音が台所から聞こえて来た。

そのとき突然、大地が地獄まで落ち、天まで跳ね上がった。大正十二年九月一日、土曜日の昼だった。

天変地異

たまげるとは魂が消えることだ。幸助は魂がどこかに吹っ飛んだように感じた。あわてて何かに掴ろうとしたが壁も柱も大揺れだった。天井からは砂埃が舞い降り、部屋中に塵が立ち込めた。どうにも立っていられず、床を這い回ってあわててしがみ付いた火鉢も部屋の中を滑って回った。轟然とした地鳴りが続き、家がミシミシと軋む。上下の揺れは次第に収まったが、大きな横揺れは長く続いた。

〈おとう、慌てることはないよ。死なないから〉一平は平然と言った。へさあ、おとうが男になれるかどうかだぜ。落ち着いた顔して下へ降りなよ

見渡すと、部屋の箆笥が倒れ、引き出しから衣類があふれている。積んであった本は床に散乱し、窓ガラスの何枚かは割れていた。

〈ここはどうする〉

〈放つとけ〉

言われるまま幸助は階段を降りた。階下では老夫婦が呆けたようにへたり込んでいた。老婦は台所と居間の間にうつ伏せて念仏を唱えていた。老夫は卓袱台を抱えて目を見開き震えていた。

「そのままいてください。余震が来ます」

自分も床に伏せた瞬間、先ほどと同じ大きさの揺れが来た。幸助の体は畳から二寸も浮き上がった。天井板が剥がれて落ちてきた。揺れが収まったのを見計らって、幸助は押入れの下段から夜具を引きずり出し、あい

た空間に夫婦を押し込んだ。老婦は足腰が立たず、仕方がないので強引に引きずって来た。幸助自身は、わずかに空いていた押入れの上段に飛び込んだ。その時また大きく揺れた。

「幸助さん、三回も揺れたがいつ終わるのかい」下段から老夫がきいた。

「今日は大きいのがあと一回あるような気がします。でも、この家は潰れませんよ」

あちこちから半鐘の音が聞こえ始めた。

「そのままいてください」幸助は台所に行つてかまどの火が消えているのを確かめた。素麺を茹でる鍋がひっくり返り、水が火にかかったらしい。台所には瀬戸物の破片が散乱していた。次に、道に面した玄関の引き戸を開けた。建具が歪んだのだろう、思い切り引つ張らないと戸は開かなかつたが、これでいつでも逃げ出せるようになった。

「もう押入れから出ても大丈夫です。床にいろいろ落ちていますから瀬戸物やガラスで怪我しないように」

外からは叫び声や悲鳴に混じつて「火事だ、火事だ」と大声が聞こえた。老夫は押入れから出ると、倒れた箆笥の引き出しから印半纏を探し出して羽織った。

「おじいさん、どうするの」老婦が驚いて尋ねると、「行くよ。これでも町会の役員だぜ」と言う。

幸助にも引き止められそうもないので、せめてこれだけはと座布団を頭に載せ、落ちないように兵児帯で結わえ付けた。こんな妙な格好はいやだと言いつつながら祖父は出かけて行つた。

「幸助さん、当たったね。本当に芝居どころじゃなかったよ」

小さな揺れは何十回もあった。大きいのは後だけに「またか」くらいにしか感じなかったが、その度に屋根瓦が何枚かずつ落ちたようで、道路に当たつて割れる音が聞こえた。表の道では人々が右往左往している。

〈もう一回来るのか〉一平に尋ねた。

〈一時間以内に来る。三度目と同じようなものだろうな〉

「まだ来ます。落ちては困るものは片付けておきましょう」

老婦はまだ押入れにいた。その指示を聞きながら、神棚を下ろしたり額縁を外したり、幸助は懸命に働いた。「まるで息子が孫だねえ。心強いよ」この家に来て初めて褒められた。

ついでに居間から玄関へ、物を跨がなくても行けるように通路を作っていると老父が飛び込んで来た。頭に座布団を載せたままだ。

「これはいい思い付きだ」老父は座布団を差して言った。「瓦や何やら落ちて来やがってひどく剣呑だ。あっちこっち大騒ぎで、いくつか火事は小火で消したが壊れた家の下敷きになっているのがいるようだし怪我人も大勢いる。幸助さん、あんたも手伝ってくれ。ばあさん、地下足袋出してやんな。それから晒しても木綿でもいいから、あるつたけ出しといってくれ。それと焼酎もだ」

その時、幸助というか一平の予言通り大きな揺れが来た。老父はあわてて家の中に入った。幸助は上がり框から落ちそうになった。

幸助も頭に座布団を載せて外に出た。大惨事なのは一目でわかった。怪我をして歩けない人が何人も道の端にしゃがんでいた。血を流し、大声で泣いている子どももいる。これでも重症の怪我人は運んだ後だという。

「俺は町会の詰め所に行くから、幸助さん、あんたはカシラのところに行ってくれ。あの家の前で半纏着てるのがカシラだ」

カシラの指示で働き始めた。最初は怪我人を戸板に乗せて寺の本堂に運んだ。身動きできない老人を背負い、怪我をした子どもの手をとって、やはり本堂に連れて行った。死体もいくつかあったが、手を合わせて通り過

ぎるだけで、運ぶのは後回しだった。谷中は寺だらけなのが救いだ。どの寺でも本堂や宿坊などを避難民や怪我人のために開放していた。

大体運び終わると、今度は金梃子を渡され、壊れた家の下敷きになっている人の搜索に加わった。一平が大活躍した。もちろん他の人に一平は見えないから幸助が大活躍したことになる。百発百中で人が隠れている場所を探し当て、一時間で数人を助け出したのだ。ただ困ったことに一平は犬も猫も、鼠まで助けたがったことだ。瓦礫を掘ってみると親猫と五匹の子猫が出たこともあった。

〈人間だけでいいんだよ〉

〈やだね。俺は生き物全部を助ける。人より猫のほうが佛に近いと思わないか〉

〈宗教論議やつてる場合じゃないだろ〉

〈ああ、後でゆっくりな〉

壊れた家の跡を掘り返しているうちに、あたりの空気と空の色が変わってきた。この町内の火事は消したはずなのに煙の匂が強くなって空が霞み始め、蒸気機関車の煙の中にあるような景色になった。

下町が大火事だという。風が強いから火の粉が飛んで来るかもしれないとも言われた。しかし下町とは線路六本分も離れているし、こちらは高台だ。山火事の経験からしてもそれほど危険はないように思われたのだが、案に相違して本当に火の粉が舞い始めた。

カシラは大工の棟梁と植木屋の大將と組んで若い者を全員集め、自警団を組織した。まず、出来るだけ多くの桶を集め、水を満杯にして町内の各所に置くことにした。幸助は田舎から来た下宿人だから自警団の員数外だったけれど水汲みと水運びはみんなと同じように手伝った。町内の井戸には異変が起きていた。水量が豊富だった井戸から水が一滴もなくなり、浅くて使えなかった井戸から水が溢れていた。幸助は、どの井戸が使え

てどれが使えないかをしっかりと憶えた。

水汲みついでに、寺の本堂に水を運びたいとカシラに申し出た。怪我人が多く、水が必要だったからだ。それに、もしかすると今後しばらくは各家での炊事が出来なくなりそうだから、炊き出しの用意もすべきだった。カシラは「そりゃいいとこに気が付いた。あんたのやり方に任せるよ」と言ってくれた。

幸助は水不足の寺を調べ、井戸と何往復もして水を運んだ。田舎育ちで歩き回るのには慣れている。重いものを運ぶのもいやではない。それに、なにより一平が付いている。次に何をすれば人の役に立つのか、はつきりわかるのだ。一平は、一番困ってる人と話をしろ、と言った。みんな多かれ少なかれ困っている。一番は誰だろう。

いくつかの寺の本堂を回って、怪我人や動けない人から、今何をしてほしいかを聞いた。彼らは一様に身内を案じていた。身内の消息を知りたがっていたし、ここに避難していることを知らせたがっていた。

よし、やってやろう。幸助は大仕事に取り掛かる覚悟を決めた。いったん下宿に帰り、ありつたけの障子紙と万年筆、矢立、糊を出してもらった。紙が足りなそうなので近所の家からももらった。それらを持って寺の本堂を回り、各本堂ごとに収容されている人の住所と名前、外出から帰ってくるはずの人の名前、尋ねてくるかもしれない人の名前など全部を書き取った。かなりの人数がいて、人名の一覧表はすぐに二百人を超えた。紙が足りないの、寺から古新聞をもらってそれにも書いた。

まだ漏れがあるかもしれないが、すでに日は暮れかかっていた。とりあえずカシラの家の前に戸板を何枚も立て、一覧表を張り出した。

張り出すと何人かが大声を上げた。帰ってきたが家に誰もいないので心配していた人たちだ。彼らは身内の名前が書かれている寺に走って行った。それから後、人探しならカシラの家の前、というのが定着した。幸助

は新しい人探し情報が入るたびに一覧表に追加していった。無事に会えた家族も多かった反面、いくら待っても帰って来ない人もいた。浅草、下谷、銀座、新橋あたりに勤めていた人たちだ。

夜の九位時ごろ、路上で下宿の老夫と出会った。

「幸助さん、お手柄だ。あの人探しの高札は名案だよ。カシラの家の前ってえのもいい。カシラが作ったみてえだからな」

「いや、そんな。運よく助かったんですから何かしなくちゃ。それより下町はどうなっているんでしょう」

「どうもこうもねえ。全滅つてえ噂だ。あとで墓地の先まで行ってみりゃあわかる」

腹が減っているのに気付いた。老夫と下宿に立ち寄ると大きな握り飯が待っていた。

「こんなときでなんだが、昨日の夜のこたあ謝るよ」夫婦が幸助の前に手をついた。「芝居に行くなんて言われて、つい腹が立つちまった。申し訳ねえが、あんたの言うことが信じられなくてな」

「やめてください。私の予感など外れたほうが良かった。いきなり不躰に出かけるなんて言われたら、誰だつて怒ります。その手を上げてくださいよ。それから約束は必ず守りますから。来週にでも芝居が再開したら、すぐに切符は調達します」

芝居小屋がそう簡単に復旧しないことは、その夜、崖の上から見渡した光景で明らかだった。墓地の東端、山手線の線路の上から見おろした下町は、どこもかしこも真っ赤に焼け、街は大きな火柱の下にあった。空は黒煙で覆われ、炎が黒煙を照らし出していた。

自警団

カシラが組織した自警団は、当初は火の用心部隊だったが、一夜明けると朝鮮人狩り集団に変貌していた。幸助にはわけがわからなかった。何でも、この火事は朝鮮人が火をつけたもので、騒動に乗じて日本人を殺しに攻めてくる、現に、襲撃に遭った店もあるし暴行された女性もいるという話だ。

「一平、朝鮮人はそんなに悪いのか」

「即席で社会学の講義は出来ないけど、結論から言えば全部嘘だよ」

「じゃあ、なんでそんな話が広まって騒いでるんだ」

「簡単に言やあ八つ当たりだ。罪悪感の裏返しとも言えるな」

「よくわからないよ」

「これだけの天災だろ、被災して腹が立って誰かのせいになりたいんだよ。持つて行きようがないから一番簡単な朝鮮人にしたんだろ。これまでずつといじめてきた相手だし、復讐されるつていう妄想があってもおかしくないからね。でも嘘なのは少し考えればわかるよ。朝鮮人の人たちも被災してるんだから」

「それじゃ、まるで根も葉もない流言か」

「まあ、火事場泥棒しようつていう朝鮮人が皆無とは断言できないけどね。それより日本人にだって火事場泥棒はいるよ」

幸助は自警団の活動に一切関わらないことに決めた。「私は喧嘩が強くないですから」という理由にしたが、

それはそれで事実だ。寺の本堂を回って怪我人や病人の世話をし、水の分配や炊き出しの手伝いもした。尋ね人掲示板も続けた。

下町の状況が少しずつ入って来た。浅草はもちろん銀座も新橋も全滅だった。上野と鶯谷の駅も燃え、省線、市電は完全に止まっていた。人が何万と死んだそうだ。病院自体が焼けたので治療はまったく出来ないという。つまり、東京でどうにか焼け残ったのは、ここ谷中近辺と、ずっと遠い山の手だけらしい。新聞が来ないので災害の全体像はまったく見えない。耳に入る話はどれも断片的なものばかりだ。

夜明けになると下町からかなりの人数が避難してきた。多くは鶯谷駅の向こう側、根岸あたりの人たちだった。荷物などほとんど無く、命ひとつでやって来た。幸助はまだ人数に余裕のある寺に案内し、水と食い物を手配しようとした。ところが自警団は避難民を一人一人吟味し、なかなか通さなかった。日本人であることを証明させようとしたのだ。そのためにはなんらかの身分証明書を出すか、自警団が納得するまで屈辱的な問答を繰り返すしかなかった。そのうち、吟味を待っている人が倒れ始めた。逃げて来るだけで体力を使い果たしたのだろう。見かねた大学生の自警団員が能率的な検査法を考え出した。一人ずつ「わたしはどぶねずみです」と言わせ、正しく言えればほぼ日本人、「とぶねずみ」になれば朝鮮人、というものだ。幸助は見ているだけで吐き気がするほど気分が悪くなった。人間という生き物は、勢いに流されるとどんなことでも平気でやると知った。

三日目、まだ余震が日に何回もあった。みな地震には慣れて、揺れる度に騒ぐことはなくなった。しかし食料の心配が出てきた。開いている店は一軒も無く、どこに行っても何も買えない。魚はまず手に入らない。日干しの鰯くらいはあるが、それも残り少ないらしい。野菜の姿はほとんど見えない。そして肝心の米も、あと何

日もつかわからないらしい。寺の炊き出しを手伝っている幸助は心配でたまらなかった。一平にも良い知恵はないようだ。まさか東京で飢饉のような目に遭うとは思ってもいなかった。一部の人は、よそから逃げて来た避難民に大切な米を食わせるのはけしからん、と陰で言っているようだ。幸助は聞かえないふりをした。

空気は相変わらず煙っぱかった。それに、正体がわからない異臭が混じり始めた。カシラに聞くと死臭だという。下町には死体があるのがついているらしい。東京はどうなってしまうのだろう。ごくたまに巡回してくる警官も、住民と同じで詳しいことは何も知らないようだ。警官は自警団とだけこそ話をして行ってしまう。自警団から漏れてきた話では東京に戒厳令が敷かれたという。真偽のほどはわからない。もし本当だとしても、事態が今より良くなるわけでもないだろう。

食料の心配からか谷中を離れる人が始めた。被害の少なかった杉並、世田谷などに行くという。そればかりか、東京に見切りをつけて田舎に帰る人も大勢いた。上野駅が使えないため、汽車は日暮里から出ている。日暮里駅では押し合いで死人が出る勢いだという。幸助はそういった人たちの移住先一覧表も作ることにした。各寺を回って説明すると、移住する人のほうから幸助に知らせてくれた。こうして、カシラの家の前はさながら住民台帳のようになった。

実はもうひとつ、下町から逃げてきた人の一覧表も作っていた。しかし微妙な問題があった。実際、幸助は試しに作り始めたのだが、ある夫婦の夫は日本人でも妻は三国人という場合がいくつかあったのだ。もちろん三国人でも日本名を持っているから、それで掲示すれば問題は無いように思える。だが万が一露見した場合、新たな迫害事件が起きるだろう。といって、問題のありそうな人を一覧表から外せば、問題ここにありと旗を立てて教えるに等しい。

〈おとうは忙しいんだろ〉

〈まあまあ忙しいよ〉

〈それじゃ、新しい一覧表は作れないな〉

ということ、流入してきた人については、頼まれれば掲示することにした。本当に、こんな面倒なときに国籍や民族なんかどうでもいいだろう。家が無くなったり腹が減れば、どんな人間だってひどく困るのだ。喧嘩なら満腹のときにやってくれ。

五日目の夜、やっと新聞を読めた。誰かが焼け果てた上野駅あたりで買ってきた東京日日新聞だ。戒厳令は事実だった。朝鮮人の暴動にも触れていたが、すべて風聞の域を出ていない。一日の地震が史上まれに見る強烈なものであることだけはわかったし、被服廠跡で数万人が焼け死んだのも知った。浅草近辺は全滅で十二階も倒れたらしい。ということは、もしかすると吉原も焼けたのではないか。一平が「見納め」と言った意味はこれだったのか。

東京の全体像がわかるにつれ、谷中はとても幸運な地域だと知った。墓場とはいえ空き地があるし、逃げ込む寺も多い。人家は密集していても下町ほどではない。だから焼け残ったのだ。上野の山から続く台地は、山手線に沿って鶯谷、日暮里、田端の手前の諏訪神社まで延びている。町名はともかくとして、この台地の上一帯が大雑把に言って谷中なのだ。古い地名と言うなら、上野の山の北半分は道灌山を足せば谷中になる。山手線の逆側、つまり西側も急坂や急斜面で落ち込んでいる。その下は谷中とはいわない。以前幸助が夕日に富士山の影を見た大階段は、上が谷中、下は通称下の町で、地域の境界でもある。

谷中に住む人々は自分たちを下町の人間とは思っていない。感覚の半分以上は山の山人種に近い。下町風の

濃厚な人間関係は、ここにはない。醬油が切れたら隣に借りるのではなく店に買いに行く。下の町や線路の逆側の子どもたちと遊ぶのを禁じられている小学生も多い。彼らは乱暴で下品なのだという。外部から見たら、谷中の人種は、ちょっと気取った似非インテリ臭いニセ山の山人に思えるだろう。しかし全体としては、書生や幸助のような受験生が下宿するには適した土地柄ではあった。

先行きが見えないまま、幸助は一日一日を忙しく過ごしていた。以前、祖母が死んだときの葬式準備の忙しさに似ている気もした。やることが山のようにあって、悲しんだり落ち込んでいる暇が無いのだ。たしかに悲しんでいるときではない。悲しまなくていいなど、世の中はうまく出来ているなど幸助は思った。

二週間が過ぎて、村から米俵が三俵も届いた。普通なら二、三日で届くところを大幅に遅れて着いたが、下宿夫妻には神か仏のように感謝された。幸助自身は、麦でも粟や稗でも生きて行ける自信があるものの、東京人は米がないと飢え死にするらしい。一俵は寺の炊き出し用に持つて行き、残りの始末は下宿夫婦に任せた。町内で幸助の株が少し上がったのは、夫婦がわけを言つて少しずつみんなに分けたからだろう。

東京は一向に復興しなかった。新聞はどうか届くようになり、野菜も出回り始めたが、電気はまだ点かず、とても従前の生活には戻っていない。帝都としての機能もなかなか復旧せず、遷都するのではないかという憶測も飛び交い始めた。そんな中、吉原のほとんどの店が仮小屋で営業を始めたという噂が聞こえてきた。

弁天池

下宿から上野まで歩いた。途中の墓地では墓石の間に大勢の人が板切れや焼けたトタンで小屋を作つて暮らしていた。上野の山ではさらに避難民が増え、通り抜けるにも一苦労だった。駅に近付くと火事場特有の臭気が強まり、それに腐臭も混じつて息をするのも苦しい。こんな東京は見たくない。幸助は上野駅の正面玄関まで逃げるように歩いた。駅前の傾いた電柱に小男が寄りかかっている。賭場の案内人だった。

「やあ坊ちゃん。ご無事でしたか」向こうから声を掛けてきた。

「あなたもご無事で、よかった。みなさんはどうしておられますか」

「あはは、殺しても死なない連中だからね。元気ですよ。そこでやってます」

「もうご開帳ですか。すごいなあ」

「こればかりは年中無休だね。そのビルヂングの二階でやってるよ」焼け残つて無人に見える建物を指差した。

「ちよつとご挨拶してきます」

ものすごく焦げ臭い入り口を入ると、いつものギョロ目男が迎えてくれた。

「坊ちゃん、早々の御出で」

「いや、今日は遊べないんです。みなさんのご無事を確かめたくて」

「そんな、わざわざ済みませんね。胴元はじめ一同息災です。賭場が臭いのだけが困つたものですが」

「それはなによりで。多少臭くても近々遊びに来ます。今日のところは火事見舞いということだ」と、幸助は男に五円渡した。一平が祝儀を渡せと囁いたからだった。

「いや、これはどうも。お待ちしてますよ」

〈どうして五円も渡すんだ〉一平にきいた。

〈五円でも少ないかもしれない。これから世話になるんだから〉

〈また、先が読めるようなこと言って〉

〈読めるからだよ〉

このときはこれで収まった。

市電は止まっているし道路は瓦礫だらけなので、浅草まで歩くのに一時間近くかかった。仲見世は壊滅状態だった。煉瓦造りでも燃えるほど火勢が強かったのだろう。しかし浅草寺は、少し煤けていたが焼けずに残っていた。仏様のご利益だろうか。幸助は観音様に初めて手を合わせた。

ピサの斜塔の写真を見たことがあるが、十二階はそれ以上に傾いていた。十階までの煉瓦造りが、ちょっと押したら倒れそうなほど傾き、それより上の階は無くなっている。もう一度登って見ておくのだったと後悔した。花屋敷も六区も、全部焼け果てて、こんな大火事で助かった人がいるほうが不思議だ。

幸助の目的地は浅草ではない。土手道に出て川上に歩き始めた。川岸に法被姿の男たちが出て、水面を見つめている。まだ死体が浮いてくるらしい。

〈二平、お前たちの力で、こういう地震や火事を止められないのか〉

〈そりゃ無理だよ。娑婆で迷ってるだけで神様じゃないからな〉

〈たとえば三年屋の亭主に頼むとか〉

〈受付が違うよ。どこに頼めばいいか俺は知らない。かあちゃんなら知ってるかもしれないが〉

〈そうか。おきぬか〉

久しぶりにおきぬを思い出した。一年も経っていないのに、あの騒動がずっと前のような気がする。

〈おとうも少しは成長したな〉

〈なんだ〉

〈母ちゃんのこと考えて、本当に悪いことをしたなんて思ってるだろう〉

〈勝手に俺の心を読むな〉

〈いやいや、子どもとして親の成長を見るのは嬉しいもんだ〉

〈肩から降りろ〉

〈やだね〉

観音様と違って吉原は焼け野原だった。大門は両側の柱だけが黒くなって建っていた。仲之町は見る影もなく、看板や幟の旗竿がいくつか残っているだけだ。ここにいたお女郎さんたちはどこへ行ってしまったのだろうか。木ノ花はどこだろう。京町二丁目だった辺りを歩いてみた。真つ黒な瓦礫しかなかった。

「人探しかい」半纏を着た若い衆が声をかけてきた。

「はい、ある婦人を探しています。このあたりにいたのですが」

「お女郎だね。身内かい」

「同郷でした」とつさに嘘をついた。

「そうか。かわいそうになあ。運の悪い女は死んじまったよ。大門を閉じちまったんで出られなかったのさ。火に追われて池に飛び込んで溺れ死んだんだ。ほら、その弁天池」

村の溜池ほどの池だった。ここで数百人が死んだという。何故だか涙が出てきた。お女郎たちの火事の前の華やいだ姿と、池で溺死した哀れな姿が脳裏に重なったからだだった。

「生きてるか確かめるあてはないでしょうか」

「そうさな、このあたりの見世なら二町ばかり離れたところに仮住まいしてるよ」

急いで行つてみた。仮住まいといつても、空き地に焼け残った材木で建てた小屋で、戸は無く筵が下がっている。出てきた女に、幸助は勇気を出してきいてみた。

「木ノ花さんという婦人を知りませんか」

「おやおや物好きナ。あんた間夫かい。若いねえ」

「いや、そういうのでは」

「まあいいさ。木ノ花ならいるよ。揚がるかい」

「ちよつと話が出来ればいいんです。会わせていただけないでしょうか」

「会うなら揚がるしかないけどな」

幸助は財布から三円出してそつと渡した。「お願いします」

「身内が会いに来たのなら追い返せないじゃないか。そこの裏手で待つてな」女は焼け残った大木を指差した。

待つ間もなく木ノ花が出てきた。葉も枝も焼けた木の下で二人は向かい合った。

「幸助といひます。前に一度だけお目にかかりました」

「地震の前の日でしょ。雨が降つてた」

「えつ、憶えているんですか」

「だつて、肩の上に小さな子どもを乗せた人なんて他にいません」

「一平、お前が見える人がいた」

「知つてたよ。どうして見えるのか知らないけどな」

「どうしよう」

「普通に話せばいい」

「ええ、少し込み入った理由があつて、息子を連れて歩いていきます」

「私に御用ですか」

「いきなりですけど、あなたを身請けしてもいいでしょうか」

「身請け？私を、どうして」

「ここから出ていただきたいだけです。どうしても出したいんです。いけませんか」

「そりゃ嬉しいけど、あなたはお客さんでもないし」

「詳しいことはここでは言えませんが、でも、南方に売るとか、悪いことを考えているんじゃないやありません。私の妻にするという名目で身請けさせていただきます。お金はどうにかします」

「かなりのお金ですよ。私に大金を、……いいんですか」

「任せてください。一ヶ月以内に話をまとめましょう。これから先は、こつちの世界に顔が利く友人が仕切つてくれます。いいですね」

「なんだか夢みたい。本気にしてもいいんですか」

「もちろんです。待っててください。それから、肩の子供のことは誰にも言わないように」

〈おとう、わかっちゃいたけど本気で身請けだな〉

〈そう決めた〉

〈あああ、やっぱり吉原なんか連れて来るんじゃないかな〉

〈木ノ花にお前が見えるなんて不思議だ〉

〈面白いね。なんか因縁があるのかな〉

〈見られて困らないか〉

〈別に。見える人にしか見えないからね〉

急いで上野まで歩いた。賭場のギョロ目と会うためだった。

木の花

焼け残ったしもた屋の内部を雑に区切っただけの料理屋だった。壁は鉋も掛けていない杉板、窓には新聞紙が張られていた。

「お忙しい時間にご足労をお掛けしています」幸助が言う。

「賭場じゃ出来ない話もありませうね、ま、一杯」ギョロ目が徳利を差し出した。

「私は一滴も飲めないんです。そういう体質で」

「そりゃいい。三道楽のひとつでもやらなきゃ極楽に行けませんぜ」

「無理ですよ。悪いことばかりしましたから。それで、折り入ってお願ひがあるんですが、その前に、私は幸助といいます。田舎の地主の三男坊で、受験のために出てきています」

「地主の坊ちゃんか、道理で金回りがいいと思った。あつしは五郎です。安全協会の五郎っていえばわかります」

「安全協会って」

「あはは、本当は松芝組ですよ。警察との都合で組を解散したことにして名前を変えただけですよ」

「じゃあそこは安全協会の賭場ですか」

「そう、安全な賭場です」五郎はにたと笑った。「ところで坊ちゃんに言いたかったことがあるんだが」

「なんでしょう」

「祝儀の出しすぎですよ。今日も五円置いてったでしょう。貰っといてなんだが、多すぎるって。一円も出しゃ

あ、どこでも充分だつて。張り込んでも二円だな。天下の御通用をばら撒くもんじゃありませんぜ」
「多いといけませんか」

「いけねえよ。間拔けなお大尽だと思われて、身ぐるみ剥がそうって知恵出す奴がいつなんどき出てくるとも限らねえ。貧乏人の振りをしなせえ」

「そうか、金銭感覚が狂っているんだ。」

「わかりました。でも相場がわからないので」

「困った坊ちゃんだ。まあ鷹揚でいいやな。それで、あつしに頼みつて何だい」

「簡単に言いますと、吉原からご婦人を一人身請けしたいんです」

「おやまあ、そりゃご発展なこと。案外隅に置けないね。で、誰ですかい」

店の名前と木ノ花という源氏名を伝えた。

「聞いたことないな。お職じゃないね。調べてみますがね、安くはないですぜ」

「そこなんです。今は二百円ちよつとしかないので、これをいくらに増やせばいいかと」

「おいおい、獲らぬ狸の尻の匂いだけかい」

「あのう、いつもお世話になつてる賭場で、私は負けたことがあります。それはご存知でしょう」

「ううんと、そうだな。坊ちゃんが素寒貧になつたのは見たことねえな」

「五郎さんだけに打ち明けますが、私は賽の目が見えるんです。毎回じゃありません、十回に九回くらい」

「壺ん中が見えるのかい」

「はつきり見えます。時々は次の次に何が出るかもわかります」

「そりゃすごい。負けねえ理由はそれかい。でも、それにしちゃ取ったり取られたりだったね」

「毎回勝つわけには行かないでしょう。皆さんにもご迷惑だし」

「ちよつと待ちな」五郎は懷から賽を二個出した。「さあ、当ててみな」と言つて、茶碗に入れ、床に伏せた。

「二六の丁です」

当たつた。何度試してもほとんど当たつた。外したのは一平が〈間違えろ〉と言つたときだけだ。

花札でも同じだった。五郎が座布団の上に伏せた札を幸助は尽く当てた。

「本物の千里眼だ。これなら絶対取られねえや。まるで神様だね。このこと、誰かに言いましたかい」

「五郎さんだけです」

「そうしときなせえ。あつしも黙ってます。そうか、胴前が二百両もありや確かに女郎の身請けくらい出来らあ」

幸助は、木ノ花とは馴染みでもなんでもなく、格子の中で見かけて一度話ただけの関係だと言つた。それでも身請けするのは、自分でも説明できない強い因縁のようなものを感じているからで、どうか助けてほしいと五郎に頼んだ。

「その代わりと言つては失礼ですが、お礼は必要なだけさせていただきます」

「お礼ねえ、男を売る商売が女郎の身請け程度でカスリを取るなんざ、どうも気が引けるねえ」

「どうでしょう、私のために動いていただく間にはいろいろと出銭もあるかと思ひます。それをいちいち計算するのも面倒ですから、全部ひつくるめて百円ではいかがでしょう。もちろん足が出たらそれなりに」

「わかつたわかつた。どうも銭の話は苦手だ。それでいいですよ。ところで、どの賭場で稼ぎなさる。目処でもあるんですかい」

「知つてるのは五郎さんのところだけです。だけど、あそこで二百円を何倍かにする勝負は無理ですよね」

「よくわかりだ。五十銭一円の素人衆相手だからな」

「もっと大きなお金を動かせる場所はありませんか」

「ううん、そうは仰るけども、見ず知らずの嘴の黄色い一見さんが、いきなり百両張ったら何か起きますぜ。坊ちゃんも地主の息子だね」

「そうです」

「じゃ、地主の子に戻ってもらいましょう」

明後日、麴町の寺で場が立つそうだ。大震災復興支援を口実に、九段の大親分が回状を回してきたという。いわば博徒の仲間内の盆で普通の人は入れない。そこに幸助を安全協会の客人として送り込もうという絵図だった。

「いいですかい、あつしの一存ですから、ヘタあ打ったときにや縁故が飛ぶだけじゃ済みませんぜ」

「五郎さんにご迷惑は決して掛けません。どうすればいいか教えてください」

「明日の午後にでもお教えしましょう。それと、盆は丁半じゃありません。本寸法の手本引きでさあ。知ってますか」

「いや、聞いたこともない」

「わかりやした。これも明日お教えしやしょう」

明日の午後二時に賭場で会う約束をして五郎と別れた。五郎はこれから仲に走って木ノ花がいくらぐらいなのか嗅ぎ回るそうだ。幸助は、明日会うまでに地主の御曹司にしか見えない服を買うように言われた。

〈おとう、渡世人になったね〉

〈受かりそうもない受験生よりましだろ〉

〈それじゃ受験生やめるかい。博打のほうが楽だろ〉

幸助は一瞬まじめに考えた。

〈だめだよ、おとう。手本引きも知らない博打うちがあるかい〉

翌日の午前中、谷中の大階段の途中にある質屋で洋服一式を買った。三越も白木屋も焼けてしまったから、洋服を売っている店で知っているのは「おちさん」という妙な名前のこの質屋だけだ。毛皮の襟巻きから革靴まで買って四円五十銭で収まった。なるほど、五円の祝儀は多すぎるのかもしれない。でも、五円が五十円でもないから、どうにか地主の息子に見えてほしいと思った。

二時少し前に賭場に着いた。五郎が用意していた別室は怪しげな三畳で妙に汗臭かった。いつもは博打に負けた奴が、借金の工面が出来るまで入っている部屋だという。「坊ちゃんには縁のない部屋だね」と五郎は笑った。部屋の中央に、白い布で包んだ畳が置いてある。

「まず木ノ花ですがね、この春に来たばかりですよ。前借もそれほど多かあねえ。一百円だそうです」

「それじゃあ二百円出せばいいんですか」

「そうはいかねえんだ。年季奉公だからね、その間に稼ぐはずの金も払うんですよ」

「どのくらい」

「なんとも言い難いんだが、二千円で言われても文句は言えねえとこですぜ。でもね、今は見世も世間並みに非常時だ。見世は焼けちまって女郎も減って、とにかく立て直さなきゃならねえ。女郎屋ってのは人の弱みに付け込む商売だから、こっちも弱みに付け込んでやりましようぜ。あつしゃあ五百円で大丈夫と踏みやした」

「五百円なら簡単ですよ」

「おやおや、えらくやくざな金勘定だね。まあいいや、それでね、札束積んで、さあどうする、にするわけだ。女郎が死んじまったと思えば五百円は棚ぼたってことだ。大丈夫ですよ。それから、女衞も絡んでるってことで、あと五十円は要るかもしれねえな」

「どうして人買いにまで金を渡すんですか」

「あの世界の決まりだね。見世より女衞のほうが面倒なこともありまさあ」

そうなると五郎への礼金も含めて六百五十円、余裕を見れば七百円ということだ。一平がいる限り幸助には自信があった。

「この話はお仕舞いで良いですかい。じゃ、手本引きをお教えしましょう」

丁半とは根本的に違っていた。客同士の勝負ではなく、客と胴元、正しくは胴師との化かし合いだ。胴師が選んだ一から六までの札を客が当てる、簡単に言えばそれだけなのだが、賽ころと違って偶然性は無い。人間同士の勝負だ。

その夜遅くまで、幸助は五郎から手順や掛け方を伝授された。もちろん当たり札が見えるのだから勝つのは簡単だが、見えていることがわかつては不味い。わざと負けるためにも掛け方は大切だった。いろいろ試して、一点張りのスイチ、二点張りのサブロク、三点張りのボンウケを主に使うことにした。あとはそれこそ出たとこ勝負で行こうと決めた。

大勝負

幸助は昼まで寝ていた。昨日、一昨日と帰りが遅く、今日は朝食にも下りて来ない幸助を下宿の夫婦は心配していた。

「幸助さん、お昼ご飯だよ」堪りかねた老婦が階段の下から声をかけてきた。

佃煮と青菜の和え物の昼食を食べながら幸助は夫婦に話した。もちろん一平の作文だ。

「どうもご心配をお掛けして申し訳ありません。中学校の先輩が麴町の支那料理屋に勤めていまして、店はどうにか焼けずに済んだものの再開するには人手が要るということで、このところ手伝っていました。やっとどうにか目処がついて今夜は早速宴会が入ったそうです。私も皿運びに呼ばれているんですが、行ってもいいでしょうか」

「そういうことか。このご時勢に景気のいい話じゃねえか。行っておいで」老夫が笑って言った。

「もしかすると夜中までかかるので、今夜は帰れないかもしれません」

「料理屋ならここにいるより食い物は良いだろうよ。そうとわかれば心配なんかしないさ」老母も言った。

「一平、お前嘘つくのうまいな」

「へしょうがないだろ。まさか女郎の身請けで忙しいとは言えない」

三時に下宿を出た。宴会の準備には適当な頃合でも麴町の花会は七時からという。二百円もの金を持って避

難民が大勢いる上野をうろうろしたくはない。幸助は上野の賭場に直行した。今日は丁半の気分ではない。入り口近くの部屋に屯している若い衆と無駄話をして過ごすことにした。

安全協会の前身、松芝組は江戸時代から続く正統派の博徒だった。正統派であることを誇りとし、政治や経済への進出は極力控え、縄張りの拡張にも消極的だった。組の最大の掟は素人衆に迷惑を掛けてはならぬことで、酔って女性に声をかけると半殺し、八百屋からみかんを一個くすねると縁故が飛ぶという厳しいものだという。一方、不良少年の保護には熱心で、どんなはみ出しでも組に入れて修行させた。今でも警察から不良少年の更正を依頼してくるらしい。この話をしてくれた若い衆も、数年前に警察から送られてきたという。

松芝組は代紋を下ろしたわけではないらしい。幸か不幸か組長の親族に警視庁の高官がいて、いろいろなことやこしいことにならないために、安全協会という曖昧な名前に表向き変更しただけだという。何の安全を守るのか誰も知らないのだが、組長は市民の安全を守ると解釈している。だから縄張り内で揉め事があると頼まれなくても急行し、時には身銭を切っても丸く収めるという。

半纏の背に代紋を染められなくなった代わりに賭場の開帳は完全に黙認されている。近隣の組から見るとまったくもって不公平だ。できれば乗っ取って賭場の権利を奪いたいところだろうが、安全協会に喧嘩を売るとは即ち警察に喧嘩を売ると同じなので、今のところは平穩無事に過ぎている。

渋茶を吸いながらそんな話を聞いた。また、五郎は賭場では出方のような仕事をしているが、実は若頭格で親分から島を預かる身だという。上野駅一帯が五郎の島とのこと。五郎は安全協会の対外的な仕事も全部任せられ、次代組長と目される幹部でもあった。そんな偉い人とは全然知らなかった。

五時少し前に五郎が顔を出した。幸助の服装を上から下まで見て、

「地主の長男には見えねえが次男坊には見えますよ」と言った。

「一階級特進ですね。伊達眼鏡でも掛けましょうか」

「いや、もう少し阿呆面のほうがいいくらいだ。さあ、出ましようかね。道が通れねえといけねえから」

市電も省線も止まっていて、どうやって行くのかと思ったら、外に自動車が待っていた。自動車はいつも見ているが乗るの初めてだ。扉を開けて、よじ登るように乗った。

「見栄ってもんですよ。歩いて行っただけいいんだが今日のところは」

車体は揺れるが椅子が柔らかく、電車より乗り心地は良かった。運転しているのは若い男で見覚えがあった。

「半六でさあ。賭場にいたでしょ」

五郎に言われてよく見ると、たしかに賭場で寝転がっていた若い衆だ。こちらを振り向いて「よろしくお願います」と言った。

「こいつはね、妙な才能があって博打に負けるのが得意だね。決まって逆目にばかり張りやがる。このままじゃ出世はできねえから、親分、いや会長が足洗わせろって言うんで、自動車の運転習わせたんですよ。来年にやあタクシー会社に入ることになってます。半六、もう運転免許は取れたんだろ」

「はい、お陰様で乙免許ですが」

「甲でも乙でもいいやな。正業でしのびりや言うこたあねえぜ」

「でも兄貴、まだ博打に未練はありますよ。それに何の恩返しもしないうちにケツ割るようで」

「おめえみてえな半端なやくざは組から出てくのが恩返しだよ」

五郎は自動車に乗り慣れているのだろう、窓の景色など見ずに煙草を吸っていた。お堀端を通って神楽坂に

差し掛かったとき五郎が言った。

「坊ちゃん、ちよつと寄つてきましょう」

自動車は右折して坂を登り、小さな旅館の前に止まった。

奥まった次の間付きの部屋だった。

「さて、ちよつとやらなきやならんことがあります。まずお持ちになった二百両、出してみてくだせえ」

幸助は二重にした風呂敷をほどいて金を出した。十銭札、二十銭札、五十銭札と硬貨が混ざっている。

「あんまり見場あ良くなえな。両替しましょう」五郎は金を持って部屋を出、すぐに戻ってきた。

「半六を使いに行りました。すぐ済みますよ。それから、こういう書き物があるんですがね」

身請け証文を懐から出した。この証文と金を渡して、引き換えに木ノ花の借金証文と木ノ花自身を受け取ることになる。「読んでみてくだせえ」

要するに幸助が木ノ花を妻にするために身請けする。妻にするのだから二度と花街には送り込まないと約束する。身請けの金額はいくらいくらである、というものだ。金額と木ノ花の本名を書く箇所が空欄になっていた。

「女郎の名前もわからねえで身請け証文書いたのは初めてだ。代書屋も不思議がつてましたぜ」

証文の最後には幸助の名前として小原幸助とあり、立派な四角い実印らしきものが押してあったが古風な篆書なので文字は読めない。その隣には代人として露野五郎の名があつて、まだ印は突いていなかった。

「あの、私の苗字は小原ではありませんが」

「いいじゃないですか、あいつらに実名さらすことあねえでしょう。別に戸籍謄本付けるわけじゃなし、金さえ払やあいんです。あつしの名前だつて渡世名だしね」

たしかにそういえばそうだ。あつちだつて氏素性を表札に書けるような商売ではない。

「五郎さんの判が突いてありませんが」

「突き忘れましたよ。二種類あつてね、どっちを押すか」と言いながら二個の印鑑を取り出した。ひとつは貯金通帳に押すような普通の丸い判子、もうひとつは大型で、よく見ると露野という文字に松芝組の代紋が入っている。「話がすんなりまとまるようなら小さいのにしますが、ごたごた言うようなら、このでかいほうで」五郎はにたつと笑つて判子をしまった。

「まあ揉めるような話じゃねえですから心配は無用です。それと、証文の能書きなんか真に受けちゃいけませんぜ。妻にするつて言つたつて、すぐするとは書いてねえ。人間、心変わりもありまさあ」

そのうちに半六が帰つてきた。金は全部一円札に替わっていた。五郎は十枚ずつの束を作り風呂敷に仕舞い直した。

麹町の寺には高張提灯が掲げられ、半纏を着た若い衆が客を出迎えている。五郎は若い衆の一人に何か耳打ちした。すると本堂の玄関に羽織袴の男が出て来て幸助に微笑んだ。

「さあ、行つてらっしゃい」五郎に背中を押され、幸助は本堂に上がった。五郎は外で待つていらしい。幸助は心細くなつたが、一平は「面白そうだね」と平気で言つた。

上野に比べて盆莫座は二倍以上も大きく、畳三枚はあるだろう。真っ白な布で覆われていた。莫座の三方に座布団が並べられ、その間に灰皿が用意されていた。すでに十人以上の客がいて煙草を吸つて待つている。幸助は案内された座布団に座り風呂敷を解いた。

莫座の空いていた一辺に合力四人が二人ずつ分かれて座つた。着流し姿の胴師が合力の中央に座り、用意し

た札束を前に置く。口は利かず表情も変えない男だった。合力が客一人ずつに六枚組の張札を配る。客が六枚まで揃っていることを確認すると胴師が前に置かれた手拭、紙下の上に繰札を広げて見せた。繰札は張札よりも小さく図柄も違っている。一から六まで順番通りに並んでいた。紙下のさらに前に、繰札と同じ図柄の木の板、目木を並べた。客から見て左から一、二、三の順だ。このとき幸助はやつと気付いた。五郎と手本引きの練習をしていて、張札と繰札の図柄が違う意味がわからなかったのだ。両方の大きさを変えるだけでなく柄も変えておけば、どんなに力ツカした頭でも見間違ふことはない。賭場の安全策なのだ。まだ勝負は始まっていないのに、この場の緊張感は異様だった。これで頭に血が上れば、どんな間違いでも起きかねない。

合力が胴元の金、胴前を十枚ずつの束にして、五束ずつまとめて置き直した。これで準備は整ったようだ。胴師が繰札を右手に持ち、そのまま懐に入れる。左手は使わず、右手だけで繰札の順番を入れ替えている。客は全員、胴師の胸元に注目している。胴師は裏になって重なっている六枚の繰札を紙下に置き、手拭をさらに折り込んだ。

合力が「入りました」と言った。そして「お手は動かさずに」とすかさず言う。最初の勝負には賭けられない。丁半博打ではなく推理の勝負だから、手掛かりが何も無ければ成立しないからだという。合力が「勝負」と叫ぶと胴師はまず目木の三の位置をずらし、客から見えて一番左、つまり一の隣に置いた。そして紙下ごと裏返して繰札を見せた。繰札の山の一番上には三があつた。目木と繰札が一致しなければ、それは唄い間違ひになり客に総付けしなければならぬ。また、紙下に包んだ繰札の順番が最初と違ついても胴師の負けだ。三が出た場合、その下は四、五、六と重なつていなければならぬ。胴師の技術は簡単ではない、五郎に教つたとき、幸助も胴師役をやつてみたがまったくできなかった。

胴師は再び繰札を懐に入れ、無言で繰り始めた。

〈おとう、次がわかるか〉

〈わかるわけないよ〉

〈考えてみな〉

この肝心なときに一平は教えないつもりらしい。それならそれで俺一人で賭けてみよう、と幸助は覚悟した。三の次は、隣の二や四ではないだろう。特に四は三の裏目だ。それなら最初の勝負は、一か。いや、それも無いような気がする。なら五か六だが、六は三の二倍だ。ということは五だ。いや、三は奇数だから今度は偶数のような気がする。考えれば考えるほどわからない。もう一度三が出ることだつてあるのだ。推理の手がかりはあるようで無い。推理するにしても根拠が曖昧すぎる。

〈だめだよ、教えてくれ〉

〈最初くらい自分で楽しんだらいいだろう〉

結局、五に一点張りで十円張つた。出目は二で負けた。客の中には見事に当てた人もいる。どういう推理をしたのか、ただ勝負勘が良いだけなのだろうか。

次からは一平も素直になつて教えてくれるようになった。ただ、上野でやつていたのと同じように始めのうちは負け続けた。一点張りはやめて二点張りか三点張りで勝負したが、たまに当たつても配当は低く、外れると損失は大きかつた。

持ち金は目に見えて減り、一時間もしないうちに三十円になつてしまつた。

〈遊んでる時間はあんまりないんだ〉

〈これでも急いでるんだ〉

〈じゃ、もっと当てるよ〉

〈連戦連勝じゃまずいよ。しょうがないな、少し増やすか〉

三点張りの中が当たり始め、大も当たるようになった。持ち金は少しずつ増え、一気に二百円を超えた。

〈そろそろ大きく行こうか〉

賭け金を三十円単位にして二点張りに変えた。三回に一回は大か中が当たった。中ばかりでは大損だが、次第に大が当たるようになり、持ち金が三百円になったところで二点張りのサブロクに二百円賭けた。四を大に、五を中にした。四が出れば六百円の儲け、五なら百円の儲けになる。結果がわかっていても幸助の心臓は止まりそうだった。

紙下から四が現われた。これで持ち金は九百円だ。その後、二十円単位で五回賭け、連続して負けた。幸助は合力に五十円祝儀を渡し座を立った。手元には七百五十円残っていた。

おきぬ再び

「あつしが申し上げる筋じゃねえが、坊ちゃん、もう博打はおやめなせえ」

自動車走り出すと五郎が言った。

「盆の上に張りなすった十円の札束、博打の間はただの紙切れに見えやしませんでしたか。勝負するための切符か何かと勘違いなさっていたんじゃないじゃねえですかい。それで普通です。盆の上じゃ金が金でなくなるんです。金だと思ったら威勢よく賭けられるもんじゃありません。それが怖いんですよ」

博徒渡世の五郎からは想像できない言葉だった。

「いつも博打していると金の意味がわからなくなりまさあ。金つてえもんは働いて稼ぐもんだ。賽の出目で入ってくるもんじゃねえ。あつしらは博打が仕事です。楽な稼業じゃねえですよ。今夜は、坊ちゃんが木ノ花を身請けしたいっていう、理由はわからねえが熱い情があったからご案内しただけだね。あつしみてえな穀潰しになりたくないやあ、もう博打はやらないこった」

五郎の言っている意味がなんとなくわかった。たしかに賭場では十円の価値など考えていなかった。これで何ができるか、働いて稼ぐには何日かかるか、それも考えていなかった。逆に、本堂を出るときには、千円くらい儲けるのは簡単だな、と思っていた。

「わかりました。急に冷たい水をかけられた気分です。そうですね、こんな稼ぎ方してたらお金の有難味を忘れてしまうでしょう。出目を読めるからって、こんな稼ぎ方は罰当たりだ」

「分に過ぎたことを言っちゃまったようで。でもまあ上野の賭場にや来てくださいよ。二十銭三十銭は博打じゃねえ。遊びですから」

「ええ、お邪魔します。それから、五郎さんは穀潰しじゃない、筋目の通った渡世人だ」
「だから穀潰しなんですよ」

神楽坂の旅館で風呂敷包みを開いた。半六が手早く数える。十円の束が七十五と束になっていない札が十五円ほどあった。幸助が五郎に全部渡そうとすると、

「何があるかわからねえ。坊ちゃんはこれだけ持っていなせえ」と五郎は七百円以外の金を残し、「七百円、たしかにお預かりします。あまったらお返しします」それだけ言つて半六と出かけてしまった。もうすぐ十一時になる。

〈予定通りだな〉と一平。

〈これからどうなるんだ〉

〈うまく行くと思うよ。ただなあ〉

〈なんだよ〉

〈やくざは女郎の身請けができないんだ。そういう不文律でね〉

〈だって五郎さんは代人だ〉

〈見世がそれを信じるかどうか、だな。札束に目が眩んでくれればいいけど〉

〈どうしてそれを最初から言わない〉

〈他に方法があるかい〉

一平の奴、今頃になって心配なことを言い出した。しかし五郎は勝算があるからこそ引き受けてくれたのだろう。どっちにしても幸助はこの旅館で待つしかない。

〈おとうが木ノ花を身請けしたくなつたのは俺がいい人だと言つたからか〉

〈最初はそうだがそれだけじゃない。地震の前の日、格子越しに木ノ花と一瞬目が合つたんだ。心臓に突き刺さるみたい、運命みたいな、何かそんな感じがした〉

〈案外鈍感じゃないんだな〉

〈何が言いたい〉

〈そのうちわかるさ〉

見世との交渉が三十分や一時間で終わると思つていなかった。五郎が懸命に駆け引きしているのに自分だけのうとうと眠っているわけにはいかない。幸助は旅館にうどんを取ってもらつたりしながら明け方まで待った。それでもついに睡魔には勝てず、座布団を枕に眠ってしまった。

半六が大きな風呂敷包みを抱えて入ってくる足音で目が覚めた。続いて、にこにこした五郎と、普段着に着替えた木ノ花が廊下を歩いてきた。

「お待ち遠さん。大切な人をお連れしましたぜ」

木ノ花が幸助の前に正座し、三つ指を付いて深く頭を下げる。

「何と申してよいのかわかりません。苦界で終わるはずだったこの身を、ご縁もございません幸助さんに助けていただき」そこで言葉に詰まった。

「どうか、手を上げてください。私が好きでしたことですからお礼など言われても」

「まあいいじゃないですか。半六、下に言って酒を。坊ちゃん、一杯だけ飲んでいただきます」

本式には、いわば身請け式というようなものを結婚式と同じ手順でするのでそうだ。

「さあ、もう木ノ花じゃない、おきぬさんだ」五郎が言った。

おきぬさん……幸助は目の前の木の花を見詰めるだけで言葉が出なかった。顔かたちは村のおきぬとはまったく違う。だが名前が同じだ。これは偶然だろうか。それとも、

「一平、どうなってるんだ」

「知らないよ、俺も驚いてる。知ってたら考えたさ。そこまで悪趣味じゃない」

五郎を媒酌人にして三々九度の真似事をさせられた。形だけだがこれで夫婦まがいになった。五郎は仕事はここまですごく心得たのだろう。

「へい、それじゃあつしたちは用事がありますので一、二時間出かけます」と言い置き、心細い幸助を残して出て行ってしまった。そんな用事があるとは、幸助は聞いていなかった。

「幸助さん、私、どうやってご恩返しをしたらいいでしょう」

「ご恩もなにも、そんなものはありませんよ。お国へ帰って幸せになってもえれば」

「そんな、私の気が済みません。ぼうや、お父さんの肩から降りてくれる」これは一平に言ったようだ。

一平が他人から話しかけられたのは初めてだった。困った様子をしていたが「へい、降りるかな」と言って肩から降りた。これまで、寝ている間も体の上にいた一平が急にいなくなつて、幸助はもっと心細くなつた。

おきぬが次の間の襖を開けると白い夜具が敷いてあつた。そつと次の間に入り、おきぬは帯を解き始めた。

「今、私にできるのはこれだけです。どうか」

幸助はびつくり仰天して「違います、だめですよ。子供も見てるし」

「こんな私ではだめなんでしょうか」おきぬは泣き出しそうだった。

すると、襖のそばできよきよこつちを見ていた一平がおきぬに走り寄つて「おとうにその気はないんだよ。とにかく今は」と言つて、おきぬの肩に載り何か囁いた。

五郎の心配りというか計略だった。ここに来る自動車の中で、おきぬは五郎から、ちよつと出掛ける旨を伝えられていたという。五郎としたら木ノ花の身請けは、幸助が木ノ花に一目惚れしたからだと思えなかったのだろう。何か感じただけで色気抜きで遊女を引かす男などこの世にいない。

そのお陰で、幸助はおきぬとじつくり話が出来た。

おきぬは甲州七里村という山村の出身だった。家は小作で、三年前の霜害で蓄えが尽きたところへ小作争議が起きた。そして何かの間違いで、おきぬの父は首謀者と見做され小作地さえ失ってしまった。一家はすべてを失い、あとは一家心中か一家離散するしかないと思われたとき、おきぬが原因不明の病に倒れた。去年の十二月のことだという。

前の月から下腹が痛み始め、最初は食中りと思つて放置していたものが、十二月下旬に激痛に変わり、おきぬの体温は死人のように下がってしまった。近隣の村の医者往診を頼んだが、診察料も払えない小作の家に医者は来なかった。おきぬの母が地主に土下座して紹介してもらい、やっと山向こうの村の医者が来たときにはおきぬは虫の息だった。医者はそれなりに手を尽くしてくれた。そして、それなりの料金と薬代を請求した。無論、父は払えなかった。紹介した手前、肩代わりして払ったのは地主だった。

それまでも父は地主に借金をしていて、今回の医者代が足されて合計で七十五円にもなったしまった。地主は娘を売ってでも返せと迫った。借金さえなくなれば、温情で小作地を貸してやるという。

元旦になって、おきぬはやつと起き上がれるようになった。

餅も雑煮もない正月だった。村の小作たちは、争議の頭目にされたおきぬの父と一家を哀れに思っていたらしい。どう工面したのか、隣の男が「みんなからおきぬさんに。精をつけてくれ」と言って痩せこけた鶏を一羽持って来た。一家は有難く水煮にして食べた。

おきぬは鶏を食べながら覚悟を決めた、どうせ一度は死んだ体、歩けるようになったら、どこでもいいから花町に売ってほしいと両親に頼んだ。娘を喜んで売る両親はいない。しかし、一家の生活を考えると、もはやそれしか道はなかった。地主が女衞に連絡し、一月九日には吉原に連れて来られていた。

おきぬは体温が下がって行った時を憶えているという。凍った水に入ったようで、腹の痛みが増して徐々に体が冷たくなったという。その後は気を失い何も覚えていない。

聞いていた幸助は段々と居心地が悪くなった。おきぬが倒れたのは村のおきぬが死んだ日だ。おきぬが起き上がれるようになった元旦は、幸助の家の門に「オキヌノ雑煮用」と書かれた鶏が吊り下げられていた日だ。そして、幸助が上京したのと、おきぬが吉原に来たのは同じ一月九日でもあった。一平が言った、
「おとう、このおきぬさんの誕生日、母ちゃんの誕生日と同じだよ」

飯田町

飯田町から出る一番早い汽車で、おきぬを故郷へ帰すことにした。半六に調べてもらおうと夕方五時過ぎに汽車があるという。震災のせいで本数が減り、走っても大幅に遅れるのが当たり前になっていた。ただ、東京から脱出する人の群れは少し減り、半六によれば「座れないかもしれないが窓からぶら下がりなくてもいい」くらいに混雑らしい。

できればおきぬともう少し話をしたかった。しかし今夜はいいとして、明日から泊めるところはないし、これ以上ずる一緒について、五郎が期待するような情が移ったら困る。村のおきぬとの符合は不気味だが、へたに究明すれば数蛇かもしれない。いすれにせよ、おきぬには一平が見えるのだから浅からぬ因縁に違いない。それが詳らかになったところで、だからどうだということでもないだろうし、逆に切っても切れない縁だとしてたらますます面倒なことになるかもしれない。いろいろ考えた結果、とにかく一旦は国に帰ってもらうことにした。

幸助は手持ちの七十五円をおきぬに渡し、借金がまだ残っていればこれで返してほしいと言った。おきぬは辞退した。すると一平が「本当はあんたの金かもしれない」と意味不明なことを言い、五郎が「もらつときなせえ」と低い声で囁いたので、おきぬはどうにか受け取ってくれた。

汽車は思ったほど混んではいなかった。風呂敷包みと宿屋で作らせた握り飯の弁当を持ったおきぬは、半六

が真つ先に乗り込んで取つておいた座席に座った。

「幸助さん、五郎さん、お世話になりました。幸助さん、手紙を書きます。坊やも元気でね」

汽笛が鳴つて甲府行き列車は動き始めた。五郎が懷から何か取り出し、窓越しにおきぬに渡した。おきぬは怪訝そうに受け取り、中を見て叫んだ。

「だめです。いただけません」

「邪魔なるもんじゃねえ、持つてきなせえ」五郎が叫び返した。

汽車の後姿が焼けたビルディングの向こうに見えなくなった。

「何を渡したんですか」

「いや、餞別ですよ。残つてた五十円とあつしから五十円」

「じゃ、五郎さんの取り分は」

「取り分ですかい。そんな約束ありましたっけ。それより坊ちゃん、坊やも元気でつてえのは泣かせるねえ」

「坊や、ですか。何のことやら」

「またまた。三々九度の後はお床入りつて決まつてまさあ。この色男」

〈誤解してもらつとけ〉一平が楽しそうに言う。

「ああ、そういうことか。参つたな」

「功德つてもんですよ。手も握らねえまじや、おきぬさんも落ち着きようがなかうつて」

「そういうもんですか」

「ああ、間違えねえですよ。仮に何もいまま別れちまつたら、おきぬさんは坊ちゃんに恋しますぜ」

「恋されるんですか。よくわかりませんが」

「女心つてのは難しいんだ。賽の目よりわからねえ。まあ修行しなせえ」

「さ、あつしらも帰りましょう」

汽車は塩山に今日中には着くだろう。おきぬの家は駅から半日歩くと言つていた。今夜は駅前の旅館にでも泊まつてくれるといいが。

自動車で上野まで送ってもらい、下宿にたどり着くと夕飯が取つてあつた。幸助は礼を言つて早々に食べ、疲れていると言つて二階に上がった。幸助の生涯で一番長い一日だった。一年分の仕事をしたような心持ちだ。寒かったが畳に大の字になつて横たわる。五郎に借りが出来てしまった。きちんと返す方法を考えなくては。

〈おとう、成り行きとはいえ変な感じだな〉

〈世の中に変なことは多いさ。そもそもお前が変だ〉

〈どうして俺が見えたんだろう。謎だね〉

〈お前にわからなくて、どうして俺にわかる〉

〈三年屋でも他の人に見られるなんて聞いてなかった〉

〈済んだことだ。おきぬさんは今頃汽車の中だし〉

一平はしばらく黙つていた。何かを考えている様子だ。

〈なあ、おとう〉

〈謎でも解けたか〉

〈違うよ。根本的にわからない。おつかあもそうだがおきぬさんも、どうして酷い目に遭うんだろう〉

〈俺を責めるのか〉

〈責めやしないさ。そうじゃなくて、どうして貧乏人がいるのになって、その理由さ〉

村では考えたこともなかったが、東京に来てから幸助もそれをぼんやりと考えていた。答えはすでに出ていた。地主・小作という制度がある限り貧乏な小作はずっと貧乏でいるしかない。それがすべての元凶だ。地主の子としては認めたくない現実だった。

最近あちこちから聞こえてくる小作組合や小作争議の話は、もし村にいたら本当の意味はわからなかったろう。小作人が勝手なことを言っている、程度にしか受け取らなかったはずだ。といって地主が悪いとは思いたくない。地主を悪者にせず、どういった解決法があるのか幸助は考えた。

〈おとう、まず結論ありきじゃ正しい答は出てこないよ〉

このあたりを発端に、幸助が農学と土木を勉強することになるのだが、それは後の話。

一週間ほど下宿から出ずに鬱々としていた。馬鹿騒ぎの反動もあるが、受験も近付いたことだし、勉強するふりでもしないと形が付かないからでもあった。

手紙が二通届いた。一通は実家からで中学の卒業証明書が入っていた。厳重に封がしてあり中身は見えないが一平がいればわけなく読めた。全科目が甲で、これは地主の子の証明のようなものだ。

もう一通はおきぬからだった。小学校しか出ていないのに、しっかりと字で、お礼の言葉が書き連ねられていた。東京に行くだけの金は常に残しておくから、どんな小さな用事でも呼んでほしいとあった。

〈五郎さんは正しかったようだね〉一平が言う。

〈そうとばかりは決まっていなげ〉

〈いくら金を遣っても女に好かれない男は大勢いるんだから。おとうは良いほうだろう〉

〈うるさいんだよ〉

〈最近、吉原より玉の井が面白いつて噂だけど、行くかい〉

〈よししてくれ、もう女郎屋は勘弁だ〉

一平がいなければどんな高校にも入れない。一平がいる限り勉強などする必要はない。高校に入試の願書を出した後、幸助は講談倶楽部や文芸倶楽部を読んで時間をつぶし、週に一度は上野の賭場へ遊びに通った。適当に張つてとんとんになったところで止める。五郎に知られてしまった以上、勝つわけには行かない。賭場にはいても、盆莫座の前にいるより若い衆と話している時間のほうが長かった。

若い衆の話は面白かった。いや、面白いと言うのは失礼かもしれない。事情はいろいろだが、みんな何か理由があつて正業に就けない人たちだ。それも彼らの責任ではない理由でだ。世の中の仕組みが悪いのか、それとも人間という生き物が社会を作るためには棄民層が不可欠なのか。

やくざの若い衆と農民、どこか似ているような気がする。言えるのはこれ以上どう足掻いても上り目がないことだろう。どこにも行き様がないからここにいるのだ。そして、世の中の頭の良い連中からは別世界の人間とみなされる。不公平といつても始まらないが、どこに元凶があるのかだけは知りたいと思った。

「世間様は所詮他人でさあ。不公平、結構じゃありませんか。あつしらは、せめててめえの身の回りだけは筋が通りようにしときたいだけでね」と五郎が言った。「ところで坊ちゃん、内々の話なんだが、手本引きは面白いですかい」

「そりゃ面白いですよ。推理する博打ですから丁半の何倍も頭を使います。札が見えなければ私はのめり込む

でしようね」

「そうですか。いや、ね、ご存知の通り、安全協会が開帳する以上どんな賭場もお目こぼしなんで、ひとつ素人集相手に手本引きの場を立てられねえかと考えてるんですよ」

数カ月後、上野の別の場所に新しい賭場が開いた。一口十銭の手本引きは好評で日曜日には盆がひとつでは足らず、幸助も胴師として駆り出された。胴師なので客の張札が見えれば楽かとも思ったが、そういうわけにはいかず、逆にもっと難しくなった。一平の予知能力をしても気紛れな客の心理までは読めず、幸助は一層真面目に勝負するしかなかった。幸助の胴師ぶり評判になり、若い胴師を見ようと婦人客も来始めて、図らずも博打人口増加に貢献することになって、五郎はとても喜んだ。

紅の世界

予想通り、幸助は主席で高校に入学した。下宿の夫婦は赤飯を炊いて祝ってくれた。震災のときに知り合ったカシラは大きな鯛を杉の桶に入れて持って来て、本郷の寮への引越しを只で引き受けると言ってくれた。しかし実家からは祝金の二十円が届いただけで、一度帰って来いなどの言葉は無かった。

高校を卒業した暁には、また谷中の下宿に戻ると老夫婦に約束し、カシラの大八車に夜具一式と行李、風呂敷包みに乗せて本郷の寮に入った。下宿を離れるのは嫌だったが全寮制なので仕方がない。新入生はみな幸助より二歳年下のこともあり、どこことなく浮いているように感じた。

〈寮生の中で女郎を身請けしたのはおとうしかないから、泰然自若としてたらいい〉
妙な理由だが一平が言うのも事実だ。宴会まがいのコンパは笑顔で受け流し、上級生からの根性入れには表情を変えずに座を外した。当初、上級生から睨まれたが、どの科目のどんな問題でも幸助にきけばわかることが知れ渡ると誰からも一目置かれる存在になった。

不思議なことに幸助は勉強が楽しくなり、もつと知識や技術を身に着けたいと思い始めた。相変わらず一平が「解答」を囁いてはいたが、この頃になると、頭に浮かんでくるのが幸助自身の考えなのか一平からの入れ知恵なのか、まったく判断できなくなっていた。幸助の脳は一平を吸収してしまったように感じられた。当然、成績は学年で一番で、全学でも主席だった。

二年生の三学期、冬休みに入ろうとする頃、一平が珍しく神妙な調子で言った。

〈おとう、もうすぐかあちゃんの下宿だ〉

〈そうだな。花でも買うか〉

〈それもいいけど、つまり俺も三年目になる〉

〈生きてりゃ数えて四つか。早いね〉

〈真面目な話だよ。何か思い出さないか〉

〈何を〉

〈おとうが三年生になるのを、俺は見られないってことだ〉

〈もしかして、お前〉

〈そうだよ、三年屋の決まりがある。娑婆には死んでから三年と四十九日しかられない〉

〈待てよ。そんな殺生な話はないぞ〉

〈最初からそう言ってたじゃないか。どうにもならないんだ〉

幸助にはこれ以上もない衝撃だった。頭の中が真っ白になった。一平がいなくなったら自分はどうなるのだろう。無知で標準語も話せない山出しに戻るのだろうか。そうなれば一高生ではいけない。谷中の下宿で夕方暮れていた頃の自分を思い出した。絶対に嫌だった。そうなるなら死んだほうがいい。

〈いきなり俺が消えたら困るだろう。だから言つてこうと思つて〉

〈消えるって、おまえ、どこに行くんだ〉

〈行く先は聞いてないよ。俺だつて娑婆にいたい。掛け合つてはみるけど。どうなるかな〉

〈誰に掛け合う〉

〈わからないよ。そのうち三年屋から何か言ってくるだろう〉

それ以後、幸助は居ても立つてもいられない気分が続いた。執行を待つ死刑囚はこんな気分だろう。夜は眠れず、昼間は時計の針ばかり見るようになった。初めがあれば終わりがあつた、人間はいつか死ぬ、そうわかつてはいても一平を失うのは死ぬのと同じ、いやそれ以上の苦痛だ。残された時間は一ヶ月程度のはずだ。それまでどう過ごせば良いのか、一平が行つてしまった後はどうなるのか、自力では解決できない状況に幸助は呻いた。いや、もしかすると三年と四十九日は嘘かもしれない。何事もなくその日が過ぎ去り、一平は消えないかもしれない。時間に限りがあると言っているのは一平だけだ。あるいは、もし一平がどこかに行つてしまつても、もう自分は自立できるかもしれない。この三年間でいろいろ学んだ。他の学生と同じように自分一人で一高生であり続けられるかもしれない。

ときに落ち込み、ときに樂觀的になり、幸助の思考は尻尾を噛んだ蛇のように落ち着く先がなかった。もうすぐ正月だ。どうやって過ごすか。年末年始に人気のない寮に残るなど、考えただけで気が狂いそうになる。幸助は谷中の下宿に帰ることにした。

片時も不安から離れられない幸助の様子に、老夫婦は勉強のしすぎではないかと心配した。幸助は思い切つて打ち明けてしまおうと何度も思つたが、一平が止めた。

〈信じてもらえないよ。狂人扱いされるだけだろうよ。それに、おとうが村に送り返されて座敷牢に入るのを見るのはいやだ〉

〈信じてくれるかもしれない〉

〈よしんば信じてもらえても、どうなるもんじゃないだろう。お祓いでもされるのが関の山だね〉
 そうなのだ、誰かに信じてもらって味方に付いてもらっても何も解決しない。状況から逃げ出すのは不可能だ。いっそ死んでしまえば解決するのか。

正月が開けても幸助は寮に帰らなかった。病氣と称して谷中に隠れていた。自殺しない理由は根拠のない樂觀論からだ。一平はずっと一緒にいるかもしれない。樂觀的な目論見が当たれば、何も今死ぬことはない。目論見が外れて一平がいなくなったとき、初めて死ぬばいいのだ。そう考えて、幸助は自分が非常に打算的だと感じた。地主の子だからか。この程度のことですぐ死ぬの言っているのは、苦勞知らずの坊ちゃんだから、地主の子だからか。小作の子ならもっとしぶとく、馬鹿に返ろうが山出しに返ろうが生き抜くことを考えるのだろうか。そうは思っても、一高優等生の立場を失うのは、幸助にとって何よりも辛いことだった。

二月になり、幸助は完全に切羽詰った。そして、ぎりぎりのところで幸助は居直った。たかが一平がいなくなるだけのことでないか。自分が死ぬわけではない。三年屋かなにか知らないが一平でも自分の頭の中身でも、持つて行けるならどこへなりと持つて行け。もう俺はどうなってもいいんだ。

計算では二月十日がその日のはずだ。

深夜、窓の外が騒がしくなった。寒い北風が吹いているはずなのに外には生暖かい雲気が満ちていた。

〈おとう、お別れだよ。俺は娑婆に残れることになった〉

〈娑婆に残れて、どうしてお別れなんだ。俺と一緒にいられるんだらう〉

〈いっしょじゃない、別々みたいだよ。世話になったね。あばよ〉

肩から一平の気配が消えた。窓から紅色の光が差し込み幸助を包んだ。光は紅色から真珠色に変わり、また紅色になるのを繰り返した。不思議なこと幸助の不安は少しずつ薄れ、えもいわれぬ安らぎが心に満ちてきた。

体が宙に浮き、ゆっくりと揺れながら空間を漂う。紅色と真珠色が繭のように周囲を包む。柔らかい光以外、何も見えなくなった。暖かく幸せな気持ちだ。幸助は自分が眼を閉じているのに気付いた。それでも光は見えた。自分の居場所は世界中でここしかないと思った。

光の変化が少しずつ早くなった気がした。心地良いゆっくりの振幅から激しく早い点滅に変わった。何か悪い事が起きるような不安な兆候を感じた。幸助は目を開けようとした。開かなかった。手足を動かそうとした。まったく動かなかった。周囲の温度が急に下がり始めた。寒い。凍える寒さだ。幸助は叫んだが声にはならない。

「かあちゃん、俺も死ぬのか」

おきぬは死んだ。

暗い洞窟を抜けると遠くに光が見えた。紅色の光だ。幸助は光に向かって歩いた。灰色の粗末な着物を着て足には草鞋を履いている。近付くと紅色の光は大きな提灯だった。墨で黒々と三年屋と書いてある。周囲には自分と同じような子どもが提灯に向かって大勢歩いていた。

「お前らは生まれる前に娑婆からいなくなった。死んだわけではないから、もう一度だけ娑婆で生きる機会を与えてやろう。ただし父親が迎えに来ればだが」どこから響くのか、大声が言った。「一人ずつ前に進んで父親の名前を言うように。決まっていれば自分の名前も」



生後 1 ヶ月 ラーメン屋に来たとき



芥川賞直木賞はいらない。
ネコジャラシならもらいます

著ネコ紹介：

2021 年 9 月 1 日生まれ（多分）。見たとおりの雑種
好きなものはドライフードとネコジャラシの葉っぱ。
肉・魚とだっこは嫌い（気分による）。

三年屋

発行日：パレスチナがイスラエルの意地悪に仕返しした日から
2 年と 3 日目の日（いわゆる西暦 2025 年 10 月 10 日）

発行者：珍品堂アナログ店

著ネコ：懐古軒ルーネコ

仕方なく著作権管理させてる人間：大塚 明

無断転載無断引用はお断り。ネコにもネコ権があります。

ご意見。ご感想等はおてやわらかに、お気軽に

彼は前に出て「父の名前は幸助です。自分の名前は、多分一平になるでしょう」と言った。

幸助は一夜にして元気になり、下宿夫婦を驚かせ、翌日学校に戻った。一ヶ月以上の長期欠席にもかかわらず、どの授業でも最優秀を守った。

翌年、一高始まって以来の、入試から卒業試験まですべての試験で満点という超人的な成績で卒業し、待望の帝大に進んだ。帝大では物理学と農学、さらに土木学を専攻し、卒業時の成績はもちろん主席、金時計を賜ったという。